



公益社団法人 Association of
JAPANESE THEATRE COMPANIES
日本劇団協議会

文化庁委託事業 令和4年度戦略的芸術文化創造推進事業

黄

くがに

金

再文

発化

見



目次

CONTENTS



- P2 事業計画
- P3 事業の趣旨・目的
- P4 講師紹介
- P5 創作方法
- P6 創作過程
- P11 おはなしの背景(講師、脚本・演出からの挨拶)
- P12 舞台公演写真
- P14 「黄金(くがに)文化再発見」
朗読劇DVD鑑賞アンケート調査の分析
琉球大学 国際地域創造学部
石原 昌英
- P20 宮古島「市民劇」が明らかにしたもの～
「沖縄戦」の理解と「方言劇」の可能性
大阪産業大学経済学部
前田 達朗
- P24 ミャークフツ劇に関する
アンケート調査結果の分析
琉球大学 国際地域創造学部
石原 昌英
- P33 市民劇が気づかせてくれた黄金文化
宮古島市教育委員会
教育長 大城 裕子
- P34 演劇は素晴らしいツール
劇団びん座
仲宗根優
- P35 「黄金(くがに)文化再発見」
宮古島市民劇に出演した喜びと
宮古方言「みやーくふつ」を劇に取り入れた
今後の継承活動に期待
(一社)宮古島市文化協会
副会長、方言部会長 砂川 春美
- P36 「人と人をつなぐ物語」
TEAM SPOT JUMBLE
喜舎場 梓

年間スケジュール

事業計画

2022年
5月

開催準備(現地打ち合わせ)

宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、テレビ局・新聞社等の協力を得ながら、地元劇団とどのように協働していただけるかを検討。

6月

「平和を考えるワークショップ」

慰霊の日に、2021年度に実施した朗読劇の映像上映会を行い、参加者からの戦争証言収集、証言を元にしたお芝居をつくり、鑑賞後、平和学習についてディスカッションをする。

6月23日(木)

宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場) 開催

7月~10月

上演脚本を執筆。

2月の市民劇出演者・参加者の募集を開始(昨年度の朗読劇DVDを各学校へ贈呈)

※小中学校27校にDVDを配布。
内、4校にアンケートを実施

11月~12月

「ミャークフツワークショップ」

方言に慣れ親しみ、演劇を通して学ぶ。

12月18日(日) 荷川取公民館 開催

稽古開始。地域住民に出演者・スタッフとして参加してもらいながら、沖縄の歴史・文化にふれる機会を創出する。

<稽古>

※平日/17:00~20:00 土日/13:00~17:00

①【11月】

11日(金)・12日(土)・

13日(日)(顔合わせ・稽古)

②【12月】

19日(月)・20日(火)(脚本完成)

2023年
1月

<稽古>

※平日/17:00~20:00 土日/13:00~17:00

③【1月】

10日(火)・11日(水)・12日(木)・13日(金)・
14日(土)・15日(日)(配役発表)

④【1月】

20日(金)・21日(土)・22日(日)

⑤【1月】

24日(火)・25日(水)・

26日(木) 指導者に劇団びん座さんを
迎え、稽古

⑥【本番前】

1月28日(土)・29日(日)・30日(月)・31日(火)

2月

<稽古>

※平日/17:00~20:00 土日/13:00~17:00

2月1日(水)・2日(木)

2月2日~劇場入り 配信用動画撮影

2月4日(土)18:00 2月5日(日)15:00

場所:宮古島市未来創造センター

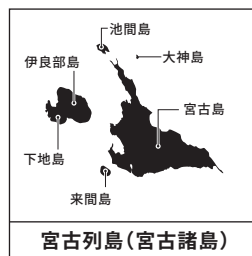
多目的ホール

後日、動画配信

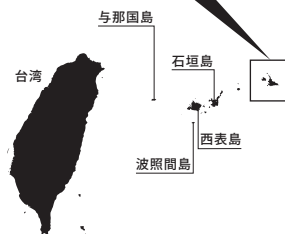
研究調査

(観客へのアンケート、出演者へのインタビュー)ワークショップ開始から公演終了後まで、琉球大学を中心に、参加者や地域住民が公演に参加し鑑賞したことにより創出された社会的価値を調査研究し評価。報告書にまとめる。

宮古列島(宮古諸島)とは

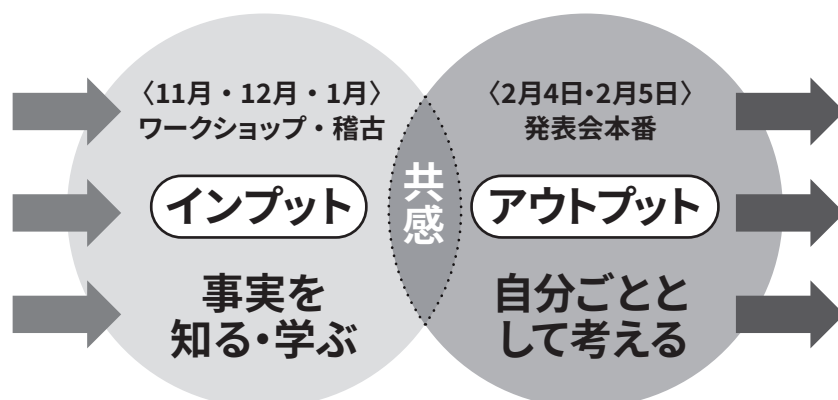


宮古列島(宮古諸島)



沖縄島の南西約300kmに位置し、宮古島をはじめとする、池間島・来間島・大神島・伊良部島・下地島の6つの島がある。

インプットとアウトプットが出来る平和劇



共感し、明日の平和を築く。

R4事業の趣旨・目的

文化庁「戦略的芸術文化創造推進事業」として、日本劇団協議会正会員であるTEAM SPOT JUMBLEと劇団スーパー・エキセントリックシアターが市民劇を創作します。幅広い観客層に鑑賞機会の充実を図り、沖縄の文化・芸能・言葉等にふれる契機とすることで文化芸術の社会的価値を創出することを目的としています。「黄金(くがに)文化再発見」という事業名は、世界に誇れる豊かな島、沖縄県の文化を発信していきたいという思いの元、名付けられました。

沖縄県では方言離れが深刻化しており、様々な取り組みが為されるものの、若年層が生活の中で方言に触れる機会を得られずにいます。また、戦争証言を直接聞くことが出来なくなりつつある今、今後どのように語り継ぐことが出来るかが、戦後に生まれた私たちの課題です。

昨年度は宮古島の「太平洋戦争」をテーマに朗読劇の発表会を実施しました。宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場)の協力を得て、13人の地域住民が参加。参加者の中に方言の継承活動をされている方がいらっしゃったことから、参加者同士で教え合い、脚本を宮古方言(ミヤークフツ)に翻訳するなど、主体的な学びの場が生まれました。また、資料や聞き取り調査を元に、戦前・戦後の遊びや暮らしを学び、演劇で体現することで、その当時の人々に想いを寄せながら作品を創ることが出来ました。

本年度も宮古島で起きた戦争の証言を聞き取り、資料から実態を踏まえ、演劇を通して戦争と方言について学ぶ機会を創出することを目標とし、取り組んで参ります。

証言を掘り起こし、市民の皆さんと共に創作する【市民劇】

2022年
6月

6月23日(木)【慰霊の日】宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場)

・戦争証言を元に創作する「平和を考えるワークショップ」・朗読劇上映会

ワークショップ講師：末吉 功治・与那嶺 圭一・村山 靖・蔵元 利貴

2022年
11月～

12月18日(日) 荷川取公民館

・ミヤークフツワークショップ

ワークショップ講師：白土 直子・末吉 功治・与那嶺 圭一・村山 靖・蔵元 利貴
ミヤークフツワークショップ方言指導：砂川 春美

<稽古> ※平日/17:00~20:00 土日/13:00~17:00

①[11月]11日(金)・12日(土)・13日(日)(顔合わせ・稽古)

②[12月]19日(月)・20日(火)(脚本完成)

③[1月]10日(火)・11日(水)・12日(木)・13日(金)・14日(土)・15日(日)(配役発表)

④[1月]20日(金)・21日(土)・22日(日)

⑤[1月]24日(火)・25日(水)・26日(木) 指導者に劇団びん座さんを迎え、稽古

⑥[本番前]1月28日(土)・29日(日)・30日(月)・31日(火)

2023年
2月

<稽古> ※平日/17:00~20:00 土日/13:00~17:00

2月1日(水)・2日(木)

2月2日～劇場入り 配信用動画撮影

宮古島市未来創造センター 多目的ホール

2月4日(土)18:00 2月5日(日)15:00

2月13日(月)～19日(日) 動画配信

講師紹介

ワークショップ講師・演技指導
01



白土 直子

(しらと・なおこ)

劇団スーパー・エキセントリック・シアター 所属

【主な出演作】

舞台「熱海五郎一座」
新橋演舞場シリーズ
(2023年5月末より公演予定)

NHK「あさいち」
ドラマ「相棒」
Web CM「丸美屋」
など

ワークショップ講師・脚本・演出
02



末吉 功治

(すえよし・こうじ)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演・脚本作】

「琉神マブヤー」シリーズ
ニライ・龍神ガナシー役
(琉球放送)
てだこ演劇祭「鬼切鬼丸」
脚本・演出・出演
('17.9 浦添市てだこホール 大ホール)
劇団岸野組「好きだってえのに」
出演(俳優座劇場) など

ワークショップ講師・出演
03



与那嶺 圭一

(よなみね・けいいち)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

「琉神マブヤー」シリーズ
ハブクラゲン役
(琉球放送)
「9人の迷える沖繩人2020」
(主催：おきなわ芸術文化の箱)
など

ワークショップ講師・出演
04



村山 靖

(むらやま・やすし)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

バラエティ「スクール革命」
(日本テレビ)
国立劇場おきなわ企画公演
「琉球講談 片足ピンザ」
など

ワークショップ講師・演技指導
05



蔵元 利貴

(くらもと・かずき)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

りっかりっかフェスタ2019・2020
「酒盗り物語」
「戯曲リーディング2021 in 沖縄」
「わが星」
(主催：日本劇作家協会 沖縄支部)
など

TEAM SPOT JUMBLE 学校現場での 演劇ワークショップ実績

2011年より、学校現場を中心にワークショップを実施。他、福祉や地域活動、社員研修などの様々なテーマに沿ってプログラムを作り、ニーズに合わせたワークショップを展開中。



▲ワークショップの様子はYouTubeにてご覧いただけます。

創作する過程を大切にグループ内で話し合う

ドラマ創作 ワークショップ

グループを作り、自分たちで役割や物語、セリフを考え、短いシーンを創作し発表します。シーンを創る過程で異なる意見をすりあわせ、新たなアイデアや建設的な考え方が生まれる瞬間を経験し、コミュニケーションについて考える場を共有します。また、経験を通した学びは、「自分ごととして考える力」に繋がります。場面を想定し、疑似体験をすることが出来る「演劇」を活用することで、主体的で対話的な深い学びへと導きます。



創作

グループに分かれて、
証言について語り合い演劇創作する。

体験する・考える・発見する・話し合う





6月23日(木)【慰霊の日】※沖縄県は祝日

第 1 部 13:30 開場
 W S 14:00~15:45(平和を考えるWS)
 上映会 16:00~17:00(上映会)

コーディネーター／喜舎場 梓
 講師／末吉 功治・与那嶺 圭一・村山 靖・蔵元 利貴

場 所 | 宮古島市文化ホール
 (マティダ市民劇場)

参加人数 | ・小学生1名・中学生6名
 (計23名) | ・大人5名・上映会観覧者11名

＼ ねらい /

- ・証言に触れ、実際にシーンを演じてみて平和を考えるきっかけにしてほしい
- ・令和4年度の取り組みをお知らせする

戦争証言をグループごとに読み込み、お芝居を創作。その当時の暮らしに思いを巡らせ、話し合います。短い創作時間にも関わらず、3グループがお芝居を発表し、3つの証言を「見る」ことができました。



第一部

- ※始まる前に椅子を円の状態で並べておく
- ※参加者がきたら名札を作る

オリエンテーション

- ・事業主旨説明・講師紹介

アイスブレイク

- ・ジャンケンゲーム・星人ジャンケン・ジェスチャーしりとり

休憩

証言を元にした芝居創作

- ・証言を元にシーンを実際に演じてもらう
- ・シーン創作の際に、その状況や動き、表情などを考えながら創作する

発表：1チームごとに発表する(15分)

振り返り

- ・証言をもとに演じてみて思ったことや感じたことをグループで共有する

全体で振り返り

- ・各グループで出した意見などを全体で共有する

役を解除

- ・役を引きずらないよう解除する

第二部

上映会

- ・令和3年度に実施した朗読劇の映像を上映する



12月18日(日)

準備 12:00
 W S 13:30~16:30
 フィードバック 17:00~18:00

コーディネーター/喜舎場 梓
 講師/白土直子・末吉 功治・与那嶺 圭一・
 村山 靖・蔵元 利貴
 方言指導/砂川 春美

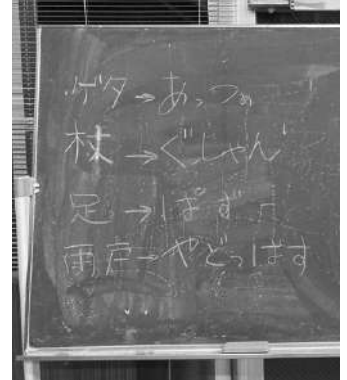
場 所 | 荷川取公民館

参加人数 | ・小学生 7名 ・中学生 9名
 (計22名) | ・高校生 2名 ・大人 4名

＼ ねらい /

- ・演劇(簡単なシアターゲーム・創作)を通して、みゃーくふつ(宮古方言)を学ぶ
- ・座学的に教わるだけでなく、みゃーくふつの使い方やシーンを自ら考えることで、主体的な学びへと繋げる。

方言指導・講師に一般社団法人宮古島市文化協会 理事(副会長)・方言部会長の砂川春美さんをお呼びして、創作シーンに入る「みゃーくふつ(宮古方言)」を学びます。みゃーくふつをうまく使いこなしたい気持ちから、参加者自ら、方言を習いに行く姿が見られました。



12月18日プログラム

オリエンテーション

- ・自己紹介

アイスブレイク

ジャンケンゲーム(宮古方言を使う)

3グループに分ける

ジェスチャーゲーム、創作、発表と講評

休憩

宮古島をPRする演劇を作る

- ・グループに分かれ、お題に沿って演劇で宮古島のCM風演劇を創作する
- ・お題：食べ物、場所、歴史、文化、伝統芸能

創作

グループで話し合い、どんなCMにするか決める

キャッチコピーを考える

キーワード追加(宮古島のことわざを入れる)

- ・例:くとうば じんじけー (言葉は、お金の様に大切に使いなさい)

キャッチコピーを方言にする

中間発表

- ・砂川春美さんに方言の使い方やイントネーションを指導してもらう

発表、講評、まとめ、投票、振り返り

グランプリ発表



①【11月】11日(金)・12日(土)・13日(日)(顔合わせ・稽古)
 ②【12月】19日(月)・20日(火)(脚本完成)

準備	実施1時間前
稽古	平日 / 17:00~20:00
	土日 / 13:00~17:00
フィードバック	実施後1時間

制作/喜舎場 梓 演出/末吉 功治
 演技指導/白土 直子・与那嶺 圭一・村山 靖・
 蔵元 利貴(12月20日 スタッフ稽古立ち合い)

場 所 | 宮古島市未来創造センター
 荷川取公民館

参加人数 | ・小学生 6名 ・中学生 9名
 (計21名) | ・高校生 2名 ・大人 4名

＼ ねらい /

- ・演劇を楽しみ、相手に伝わる表現方法を考える
- ・シアターゲームを体験することで、楽しく感情表現を学ぶ
- ・宮古島の太平洋戦争について知る
- ・方言に慣れ親しむ

21名の出演者が集まりました。台本を読み込み、
 当時の人の暮らしや心情について、みんなで話
 し合います。皆さん真剣です。

①稽古

オリエンテーション
 ・事業主旨説明 ・講師紹介

アイスブレイク

グループ分け3チーム
 ・グループでのアイスブレイク

ジェスチャーゲームや演劇創作
 ・デモンストレーション ・お題は自分たちで考える ・作戦会議と練習

発表と講評
 見せ方のアドバイスもする

振り返り

②稽古

オリエンテーション
 ・前回までのおさらい

アイスブレイク

読み合わせ
 ・台本を読んで、その当時の暮らしや人々の心情を考える

振り返り
 ・当時の状況について、教え合う
 ・読み合わせで苦戦したところ、工夫したことを共有する
 ・やってみてどうだったか？
 ・台本を読む前後で、宮古の戦争に対する考えの変化や
 感じたことを共有する



- ③【1月】10日(火)・11日(水)・12日(木)・13日(金)・14日(土)・15日(日) (配役発表)
- ④【1月】20日(金)・21日(土)・22日(日)
- ⑤【1月】24日(火)・25日(水)・26日(木) 指導者に劇団びん座さんを迎え、自主稽古
- ⑥【本番前】1月28日(土)・29日(日)・30日(月)・31日(火)

準備 実施1時間前
稽古 平日 / 17:00~20:00
土日 / 13:00~17:00
フィードバック 実施後1時間

制作 / 喜舎場 梓 演出 / 末吉 功治
演技指導 / 与那嶺 圭一・村山 靖・
蔵元 利貴 (1月20日 スタッフ稽古立ち合い)

場所 | 宮古島市未来創造センター
荷川取公民館

参加人数 | ・小学生 6名 ・中学生 9名
(計21名) | ・高校生 2名 ・大人 4名

＼ ねらい /

- ・演劇を楽しみ、相手に伝わる表現方法を考える
 - ・宮古島の太平洋戦争について知る
 - ・方言に慣れ親しむ ・反復し、セリフ・立ち位置を覚える
- 配役も決まり、稽古が本格的に始まりました。シーンごとに演出・指導を受け、練り上げていきます。回を重ねるたびに輪郭が浮き上がり、全体像をみんなで把握できるように!



③④稽古

オリエンテーション
・前回までのおさらい

アイスブレイク

各シーンに分かれて稽古

衣装合わせ

振り返り

人物の心情、発言の意図、関係性について考え、共有する

⑤⑥稽古

オリエンテーション
・前回までのおさらい

各シーンに分かれて稽古

セリフを覚える

立ち位置を確認する

振り返り

人物の心情、発言の意図、関係性について考え、共有する



2月1日(水)・2月2日(木) (稽古) 2月3日(金) (場当たり)
2月4日(土) (リハーサル・配信用動画撮影) ※2月2日～劇場入り

準備 実施1時間前
稽古 平日 / 17:00～20:00
土日 / 13:00～17:00
フィードバック 実施後1時間

制作 / 喜舎場 梓 演出 / 末吉 功治
演技指導 / 白土 直子・与那嶺 圭一・村山 靖・
蔵元 利貴 (2月1日～ スタッフ稽古立ち合い)

場所 | 宮古島市未来創造センター
多目的ホール

参加人数 | ・小学生 6名 ・中学生 9名
(計21名) | ・高校生 2名 ・大人 4名

＼ ねらい /

- ・演劇を楽しみ、相手に伝わる表現方法を考える
- ・宮古島の太平洋戦争について知る
- ・方言に慣れ親しむ

舞台にも慣れてきました。学校のシーンは和気あいあいとして本当に級友のよう。出演者みんなが伸び伸びと表現するようになりました。本番はどのような演技を見せてくれるのでしょうか？



2月1日(水)・2日(木) 稽古

オリエンテーション
・前回までのおさらい
稽古
(スタッフ立ち合い)

2月3日(金) 稽古・リハーサル

オリエンテーション
・前回までのおさらい
稽古
(スタッフ立ち合い)

【市民劇参加者】

池村 佳連・伊波 かな乃・伊波 きよら・垣花 瑚百・垣花 汐璃・加持 岳志・小西 桃花・坂本 愛・櫻井 華・砂川 昌瑠・砂川 春美・楚南 明香里・平良 茜・平良 桜・仲間 美里・仲間 玲菜・西里 ことは・西銘 結衣・福原 清長・前田 琥珀・湊 ナラヤン 渚音(五十音順)

日時：2023年2月4日(土) 開演：18:00 2月5日(日) 開演：15:00
会場：宮古島市未来創造センター 多目的ホール 入場者数445名

ご挨拶



講師・演技指導
白土 直子

昨年1月、コロナ禍で稽古日数が取れず、苦肉の策で朗読劇として上演したこの物語が、今年は予定通り一本の芝居として皆様に観て頂けることは本当に、本当に! 嬉しい限りです。

去年参加してくれたメンバーも多く、更に新しく参加するメンバーも増えて、こんな理想的なりメイクが実現するとは...と、幸せを噛み締めております。

物語的には去年と同じですが、今年は演者も、お客様も、この作品の感じ方が確実に違

うと思います。なぜなら、あの公演後にウクライナで戦争が起きてしまったから。

戦争が身近になってしまった今こそ、みんなの芝居の力で、大切な故郷の言葉の力で、二度と起こしてはいけない「戦争」という過ちを全力で伝えて欲しい。そう願います。

最後に、この作品の上演にあたり、ご協力頂いた全ての皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。

キャストの宮古島の平和を想う気持ちを、真正面から思いっきり受け取って下さい。



脚本・演出
末吉 功治

皆様、本日はご来場ありがとうございます。昨年は朗読劇という形で宮古島での戦争のお話を上演いたしましたが、今回はしっかりと演劇として皆様にご覧いただけます。第二次世界大戦時の宮古島。苛烈を極めた沖縄地上戦とは違った悲劇が、この島にはありました。艦砲射撃、餓え、マラリア。戦争は静かに、静かに島民の命を喰らっていきました。戦後、宮古島

に駐屯していた軍の資料は燃やされてしまいほとんど残っていないそうですが、沖縄県史の証言をもとに物語を創作しました。この悲惨な時代を生き抜いた方々がおられたからこそ、今の僕たちの存在があります。戦後78年にあたる今年、先達たちの悲しみを風化させないよう、先達たちのことを忘れてしまわぬよう、この物語を心の片隅においていただければ幸いです。

おはなしの背景

ここは宮古島。島の至るところにさとうきび畑が広がり、ハイビスカスやブーゲンビリアが咲き、美しい自然と海に囲まれた、言わずと知れた南国の島。風光明媚なこの島に、悲しい出来事が起こったことを、決して忘れてはいけません。学校における軍事教育。地理的に平坦な地形を持つ宮古島に海軍飛行場が計画され、小さな島に約3万人もの軍隊の駐屯が始まりました。女性・子どもも狩り出された飛行場建設作業の重労働。食糧調達も儘ならぬ様になったころ、宮古島の青い空を灰色に染める空襲が始まるのです。

*参考文献：沖縄県史(1974年発刊)
「綾道-戦争遺跡編-」(宮古島市教育委員会発刊)



ニガイ(平和恒久の願い) 砂川 春美

この世を照らします、畏れ多い神々よ。宮古島十二支方の神々様、世界中の国々島々を大きく包んで治めてくださいませ。

かの大戦で先達が夢見た、そして作り上げたこの平和を、次の、そしてまた次の世代に引き継いでゆくためにこの宮古島で起きた悲劇を決して私たちは忘れません。

この平和が未来永劫続きますよう、お守りくださいませ。

また本日、お越しくださった愛おしい方々の健康と家庭和合と笑顔をもたらし、裕福になれますように願いを聞き入れてくださいませ。

畏れ多い神々よ。宮古島十二支方の神々様、私達の島、私達の肝心(ぎむぐる)は、この地にあるのだと轟かせていきましょう。いつまでも世界が、戦のない平和の世の中が、いつまでも続くよう願います。お聞き入れてくださいませ。





「黄金(くがに)文化再発見」 朗読劇DVD鑑賞アンケート調査の分析

石原 昌英

1. はじめに

2022年1月9日に宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場)において、宮古島での戦争をテーマにしたマークフツ(宮古語)朗読劇「黄金文化再発見」が上演された。日本劇団協議会は、同朗読劇を撮影しデータを保存したDVDを、宮古島市教育委員会の協力を得て、宮古島市立の小中学校27校に配布した。その中から、朗読劇に演者として参加した児童生徒が在籍している

久松小学校、南小学校、平良中学校、城東中学校の4校の教員と児童生徒を対象として「観劇」後のアンケート調査を実施した。なお、アンケートについては宮古島市教育委員会が4校の校長の許可を得て実施した。本稿では教員対象アンケート調査をパート1、児童生徒対象アンケート調査をパート2として別々に分析する。

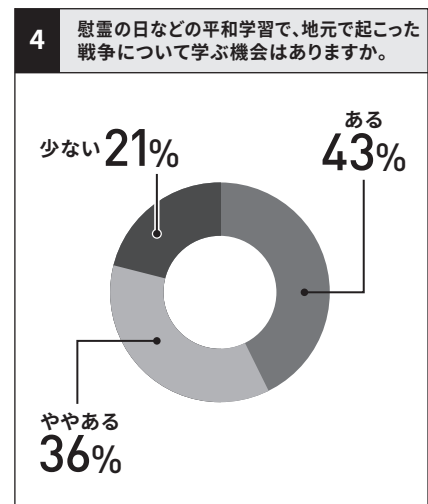
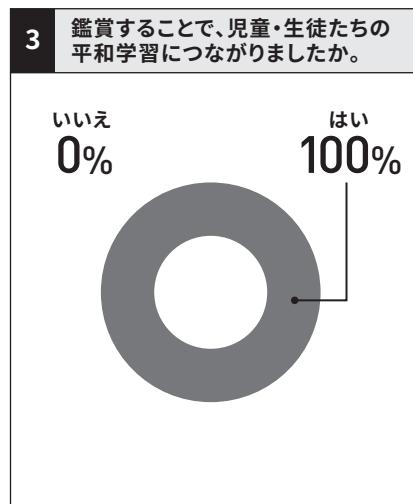
2. パート1：教員対象アンケート調査の回答の分析

教員対象アンケート質問項目は下記の通りである。

1. 学校名を教えてください。
2. 鑑賞年月日・学年を教えてください。
3. 鑑賞することで、児童・生徒たちの平和学習につながりましたか。
4. 慰霊の日などの平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会がありますか。
5. 児童・生徒たちのマークフツのレベルはどの程度ですか。
6. 宮古島市の子ども達にマークフツを使えるようになってほしいと思いますか。
7. このようなマークフツを扱った演劇の鑑賞をすることで、方言の学びになると思いますか？
8. ご家族などから聞いた「太平洋戦争」のお話や、体験談などがあればお教えてください。
9. 上の問いでお答えいただいた戦争証言を、公演パンフレット・報告書に掲載しても良いですか？
10. 感想を自由に書いてください。

令和4年11月から令和5年2月にかけて小学校3年生、4年生、6年生、中学校の全学年が朗読劇のDVDを鑑賞したようである。

質問3は朗読劇の鑑賞が児童生徒の平和学習につながるかを訊いたものである。アンケート調査に協力した教員14名全てが「はい」と回答している。児童生徒に「平和」を教える立場にある教員が、沖縄戦時の宮古島市での戦争をテーマにした朗読劇の内容が平和学習に役立ち、朗読劇DVDが教材として適切であると判断していることがわかる。



質問4は、宮古島の小中学校における平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会があるかを問うたものである。

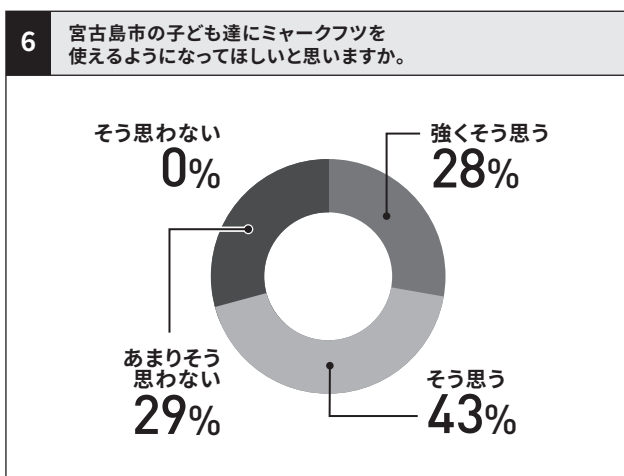
結果は、「ある」と回答した者が43% (6名)、「ややある」と回答した者が36% (5名)、「少ない」と回答した者が21% (3名)となっている。この結果から、宮古島の小中学校で学ぶ児童生徒が地元で起こった戦争について学ぶ機会は多くはないことがわか

質問5は児童生徒のマークフツ運用能力のレベルを問うたものである。

現在の宮古島市において児童生徒が家庭生活を含め日常生活においてマークフツに触れる機会はほとんどないようである(市民劇アンケート調査の分析を参照)。このような言語環境で児童生徒がマークフツを習得する可能性は低い。質問5の回答はそのような状況を反映している。児童生徒のマークフツ運用能力について、回答した教員13名中11名(84%)が「聞くことも話すこともできない」「ある程度聞ける」と判断している。児童生徒がマークフツを「聞くことも話すこともできる」と回答した教員は1名(8%)で、もう1名が「聞けるが、話せない」と回答している。まとめると、教員は、児童生徒はマークフツ能力がない、またはかなり低いと判断していることがわかる。

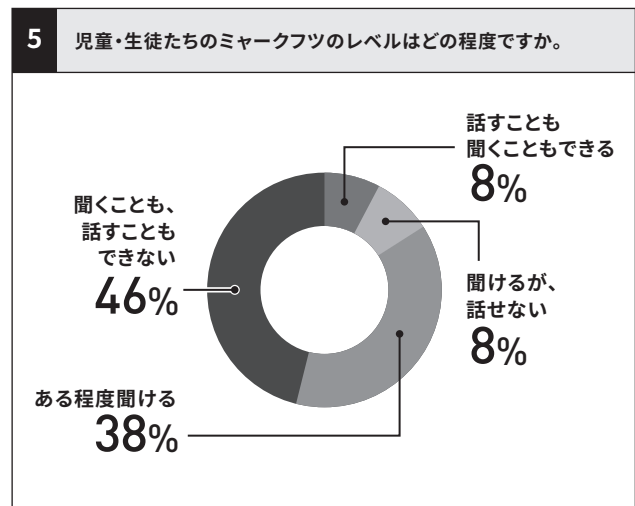
このように宮古島市においては、子ども達が継承していないので、マークフツはかなり深刻な危機的状況にあると言える。このような状況で、宮古島市の子ども達がマークフツを使えるようになって欲しいかを聞いたのが質問6である。

4名(28%)が「強くそう思う」と回答し、6名(43%)が「そう思う」と肯定的な回答をしている。一方、4名(29%)が「あまりそう思わない」



*合計の割合を100%とするために、同じ4名であっても28%と29%となっている。回答者が14名と少ないことからこのような結果になっている。

る。2023年2月4日・5日に上演された宮古島市民劇『知られざる沖縄戦～宮古島の戦争の話～』の観客を対象にしたアンケート調査の自由記述に「地元で起こった戦争については学ぶ機会がなかった」という趣旨のコメントが散見されたので(本報告書に掲載された分析を参照：後述の児童生徒の感想も参照)、平和学習で宮古島の戦争について学ぶ機会が十分ではないと推測できる。



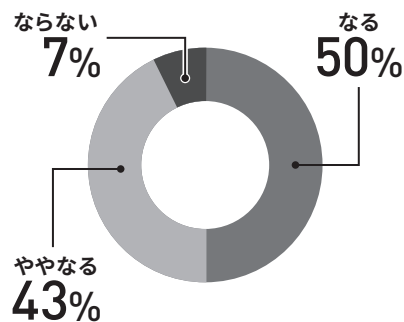
と否定的な回答をしている*。「そう思わない」と回答した教員はいない。肯定的な回答をした者は合わせて10名(71%)であるが、宮古島の小中学校において、児童生徒がマークフツに興味を持つ、ことばへの気づきを喚起する活動をどのように実践するかが課題となるであろう。

現状では、マークフツは国語科目の時間に教えることが想定されているが、宮古島の動植物、歴史・文化、および地理的特徴などを教える国語以外の科目の中で教えることも可能であろう。また、マークフツに特化した放課後のクラブ活動も可能である。そのような活動の一つが演劇である。児童生徒が関心を持つようなテーマの劇を地域住民と協力しながら作り上げていくことが可能である。教員が日本語で台本を書き、その教員にマークフツの知識がなければ(足りなければ)、児童生徒の父母・祖父母を含めた地域住民の協力を得てマークフツに翻訳するのである。発音指導についても、マークフツに堪能な地域住民にお願いすれば良い。地域住民は子ども達がマークフツを話せるようになってほしいと思っているであろうから、積極的に協力することが期待できる。

質問7では、マークフツがセリフに含まれる演劇を鑑賞することが、マークフツの学びになるかを問うた。

アンケートに協力した教員14名のうち、(朗読劇を含む)マークフツ演劇が方言の学びになると思わない、と否定的な回答をしたのは1名(7%)のみある。一方、13名(93%)が「なる」「ややなる」と肯定的な回答をしている。教員と児童生徒が鑑賞した演劇は宮古島市で起こったことをマークフツで表現しているので、「アンナー」とか「ダイズ」のように日常的に使われていることばがセリフに含まれている。児童生徒は聞いたことがあることばが出てくると関心を持つようになるであろうから、地域言語のマークフツを扱った演劇は方言の学びになるとされる。自分は知らなくても、「おばーちゃんが使っていた」「おじーちゃんが使っていた」とことばへの気づきの契機となる可能性もある。

7 このようなマークフツを扱った演劇の鑑賞をすることで、方言の学びになると思いますか？



質問8と質問10は自由記述で回答するものである。まず、質問8では、家族等の戦争体験に関するものである。次のような回答があった。

質問8

- ・戦後の食に困った話で、セミヤ犬を食べた話を聞いた。方言を話すとスパイ疑惑をかけられる話があった。
- ・食べ物がなくとてもひもじい思いをしていた。
- ・亡くなった祖母から話しを聞かされたことがある。空襲がとても恐ろしかった。
- ・大正3年生まれで亡くなった祖母が話していたことですが、食事中に爆弾がきた、という話を聞きました。(宮古島平良市内)
- ・城辺の実家に平良方面から疎開した人がいて、40年前にその方がお礼に来ていたこと。母の実家から見た宮古島の南海岸に、米軍と思われる艦船が見えたこと。祖母の兄が中国戦線で死亡したこと。
- ・幼かった伯父と伯母が、不発弾の爆発で亡くなり祖父母が相当辛い思いをしたことを母から伝え聞いている。

中には宮古島市の平良と城辺で起こったことに関する証言もあるので、それらの記述をした教員にとってはDVDで鑑賞した朗読劇は身近に感じられるものであったであろう。「祖母の兄が中国戦線で死亡した」という証言は、登場人物の光子の父が出征していた

ことにつながる。このような証言は宮古島市で起こった戦争をテーマとした演劇にエピソードとして組み込むことができそうである。

質問10は朗読劇鑑賞の感想についてである。次のような自由記述回答があった。

質問10

- ・生徒にとって宮古方言(マークフツ)に触れることよりも、平和学習の取り組みの方が身近なので、本VTR視聴も平和学習として受け取っている生徒が多いように感じた。
- ・低学年用のアンケートもあればもっといいなと思いました。
- ・生徒が出演していたこともあり、集中して視聴していた。劇になっていることで、平和教育がしやすかった。
- ・とても見やすい内容構成だった。このような劇をDVDではなく実際に見る機会があるととても良いと思った。
- 1.城東中の生徒が出ていたことで後輩達も興味を持って見られました。
- 2.方言のセリフは字幕があったことで意味と音声を同時に学習することができたと思います。
- 3.ヤミ市、子だくさん(表彰)、方言札など、戦時中のリアルな人々の生活が分かりました。
- 4.日本軍の強引な指示でかつての飛行場ができたのかと思うと、複雑な思いです。
- 5.女子報国隊という存在を初めて知りました。住み込みさせられるかもしれなかった、とはやはりそういうことなのかな...と考えたりしました。
- 6.昭和19年、こんな空襲があったことも知りませんでした。
- ・沖縄本島の方言や戦争についてだけでなく、地元に着した言葉や話が生徒にとってはより考えやすい教材だと思いました。

- ・初めは「怖そう」「ドキドキする」などの声もありましたが、笑いの要素も含まれており、戦争の話が苦手な児童も最後まで見る事ができていました。また宮古方言を使うシーンでは字幕がついていて、宮古島出身でない児童にもしっかりと内容が伝わっていたと感じます。劇を通しての平和学習は、普通の学習では学べない、感じられないことがありました。ありがとうございました。
- ・涙を流しながら鑑賞する児童もいて、心に響いた朗読劇になっていると思う。鑑賞後には「もう戦争の話は悲しすぎていやだ」という児童もいたが、後生に伝え続けることが、今後の平和につながると思う。
- ・戦争体験と方言には、意識して伝えていかなければ忘れられていくという共通の課題があることに気づきました。
- ・方言を取り入れた演劇で、真剣に鑑賞した生徒も多かったです。改めて勉強になりました。
- ・平和学習で沖縄戦について学習を行っているが、宮古での戦争のことをもっと詳しく知りたいと感じました。また、地元のことを知ることで、もっと深く学ぶことができると感じました。
- ・宮古方言と平和学習ができて良いと思います。宮古島についてこういう教材がどんどん増えていったらいいと思います。

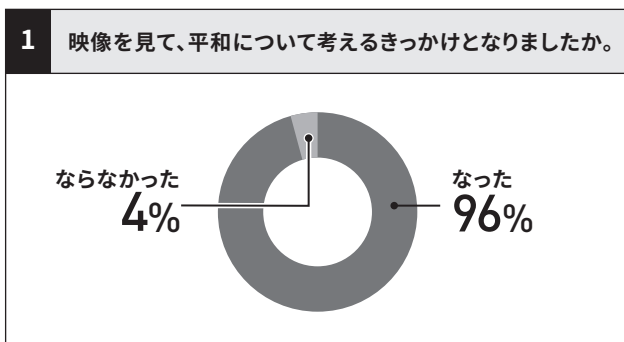
全ての記述が宮古島市で起こった戦争をテーマとした演劇を平和学習および言語学習の教材として価値を認めている。演劇で取り上げられたエピソードと関連して、宮古島市で実際に起こったことを知らなかった、という記述もある。この演劇が新たな学びをもたらしたのである。また、マークフツのセリフには

日本語の字幕があったので、島外出身者も理解することができたとの記述がある。宮古島市出身の児童生徒のほとんどもマークフツのセリフを全て理解できるということはなかったであろうから、日本語の字幕は内容を理解することの助けとなり、ことばへの気づきをもたらしたであろう。

3. パート2：児童生徒対象アンケート調査の回答の分析

児童生徒対象アンケート調査には、久松小学校、南小学校、城東中学校、平良中学校の児童生徒661名が回答した。質問項目のうちデータ分析をしたものは下記の通りである。

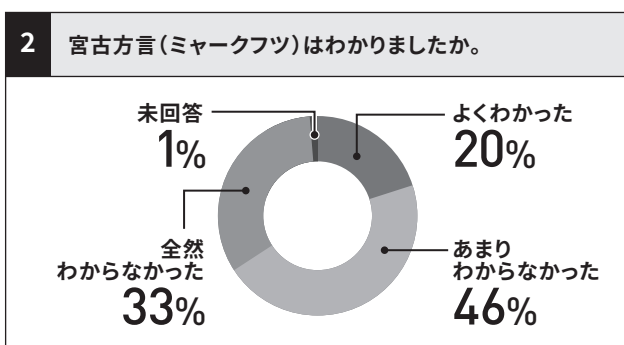
1. 映像を見て、平和について考えるきっかけとなりましたか。
2. 宮古方言(マークフツ)はわかりましたか。
3. 知っている宮古方言(マークフツ)はありますか。
4. 上の質問で「ある」と答えた方にお聞きします。知っている方言をお書きください。
5. 映像を見て、一番心に残ったシーンはどこですか？
6. 感想を自由に書いてください。



質問1は、朗読劇を鑑賞することが平和について考えるきっかけとなったか問うたものである。

回答者661名のうち631名(96%)が「なった」と回答していて、27名(4%)が「ならなかった」と答えている。自分が住んでいる宮古島市の戦争がテーマで、島で実際に起こったことがエピソードになっているので、より身近に感じられて、平和について考えるきっかけとなったと思われる。

質問2は演劇のセリフに出てきたマークフツの理解度に関するものである。



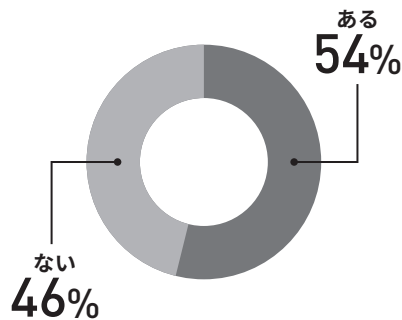
「よくわかった」と回答したのは119名(20%)で、「あまりわからなかった」と回答したのは270名(46%)、「全然わからなかった」と回答したのは197名(33%)であった。

宮古島市においてマークフツが10代の子ども達に継承されていないと、児童生徒が日常的にマークフツに接する機会がないという状況であるので、朗読劇を鑑賞した児童生徒のマークフツ運用能力はかなり低いと推察できる。「よくわかった」と回答した者が20%もあることは、筆者にとっては良い意味で驚きである。

質問3はミャークフツに関する「知識」を問うたものである。355名(54%)が知っている宮古方言(ミャークフツ)が「ある」と回答し、306名(46%)が「ない」と回答している。質問2の回答からすると、児童生徒のミャークフツの能力は演劇のセリフを理解できるレベルのものではなく、単語レベルの知識であると推察できる。

質問4で児童生徒が知っているとおげたミャークフツは「ダイズ(とつても)」「アンナー(お母さん)」「ズミ(最高)」「ンミャーチ(いらっしゃい)」「タンディガータンディ(ありがとう)」「ピンザ(山羊)」「アパラギ(美しい)」「ンギヤマス(うるさい)」などの「単語レベル」のものだけである。中には「ノーユーガシーユーヤラガー(何をしているのかね)」という疑問文をあげた生徒もいた。

3 知っている宮古方言(ミャークフツ)はありますか。



質問5の「一番心に残ったシーン」については下記の回答があった。なお、全ての自由記述回答ではなく抜粋である。

質問5

- ・空襲が来て、みんな[機銃で]撃たれて倒れるところ
- ・無差別空襲や飢え、マラリアで死んでいくところ
- ・女子も男子と同じ力仕事をしてたところ
- ・若い人や女の人も辛い労働を強いられてたところ
- ・学校の授業
- ・学校が警報とかで中止になって家に帰るところ
- ・お母さんが食料を探しに行くシーン
- ・お母さんが子どものためにお芋を取りに行ったところ
- ・お母さんがマラリアで亡くなってしまったところ
- ・「死ぬくらいなら家で...」って女の人が言って空襲の音がしたところが怖かった
- ・ミャークフツを知らない日本兵について方言で語りバカにしているシーン
- ・日本兵が方言の意味について聞いてきたところ
- ・方言を使うと方言札をかけられたシーン
- ・自分の畑が日本兵に取られたところ
- ・天皇陛下のためだと言って日本兵が住民から畑を奪うところ
- ・死ぬ覚悟じゃなくて生き抜く覚悟をしなさいと言ったところ

児童生徒の心に残ったシーンとして、戦争が「死」と直結しているところ、その死は飢えや病気で起こること、楽しい学校の授業が「一瞬」で恐怖に変わること、戦争前から戦争準備が始まって

いることなどの戦争に関するシーンが挙げられている。また、方言札、ミャークフツがわからない日本兵についてミャークフツでバカにすることなど、ことばに関することもあげられている。

最後に、質問6について、朗読劇を鑑賞しての感想について下記の回答があった。なお、全ての自由記述回答ではなく抜粋である。

質問6

- ・映像を見て戦争はただ人の命を失うだけで何も得ることができないものだと思います。これからもう戦争なんてやらないでほしいです。
- ・太平洋戦争だったときの宮古島のことをしれてよかったです。朗読しているときに、悲しいときや嬉しいときなどの表現が入ってたところもわかりやすかったです。
- ・方言で喋っているときも下に通常語(日本語の字幕：筆者)があったのでわかりやすかったです。
- ・戦争のこと、平和のことについて一つでも深く知れたという実感があったので良かったです。
- ・今回の映像を見て戦争はいけないことをより一層知ることができました。ひいおばあちゃんがちょうど戦争時代に生きていたので、大変な思いをしていたことを知りました。
- ・宮古の戦争について知るきっかけになりました。マラリアという病気がとても怖かったです
- ・宮古の方言がわからないところがあったけれど、字幕があって見やすかったです。
- ・演技がとても上手で実際に自分がそこにいたらどんな行動を取るかな...など、色々なこと考えながら読みました。BGMなどで、更にハラハラしながら聞きました。(見ました)

- ・結構長かったけど、ものすごく勉強になりました。
- ・宮古島には、そんな悲しい歴史があったんだと、わかりました。宮古の人として、もう2度とこのようなことがなくなるようにねがっています。
- ・方言を喋ったら方言札をかけられることを初めて知ったし、戦争のことを学んできたけど劇で学んだ方が改めて怖さを感じた。
- ・慰霊の日などは宮古島で起こった戦争はあまり学んだことなかったの、今回の劇で知ることができたので良かった。
- ・沖縄本島の戦争については知っていたけど、宮古島でも飢えや重労働など大変なことが沢山あったんだと知った。
- ・戦争は兵隊だけでなく、市民も大変だったんだということに気付けた。
今、日本が平和なのは、過去にこういう体験してきたから、ということに改めて気付けた。
- ・沖縄本島の戦争については知っていたけど、宮古島でも飢えや重労働など大変なことが沢山あったんだと知った。
- ・とても分かりやすい朗読劇で、宮古方言も字幕も出ていてスゴク分かりやすかった。今の沖縄がとても平和だなというのが改めて実感できました。
- ・悪くもない人々も戦争によって亡くなったり、畑をとられて飛行場にされたりと知り、改めて戦争は良くないと感じた。
- ・今ではあんまり考えたりすることとかはなかったけど改めて戦争について考えさせられました。
- ・戦争がどんな感じなのか想像とかできなかったけど、劇を見ることで当時の感じとかがわかったので戦争について改めて考える機会だった。
- ・沖縄戦については小学校の修学旅行で学んだが、宮古で起こったことについては知らなかった部分もあるから学べてよかった。
今後このような戦争が起きないような世の中になって欲しいと思った。
- ・方言大事だなと思った、戦争だめだと思った。
- ・兵隊も頑張っていると思うけど宮古島に残っている人も命がけでがんばっているのがわかった。
- ・このお芝居を見たことで、自分の戦争についての思いを考えることができたし、マークフツも知ることができた。
- ・戦争の劇を見てみて、戦争のときに栄養がなくて亡くなる人や病気にかかってなくなる人や銃に撃たれて亡くなる人がいたことを劇で知ることができました。女の人は、朝から日が沈むまでずっと大変なことをさせられていたことも分かって、昔の宮古島はとっても大変ということが分かりました。自分も困っている人がいたら助け合いをしようと思いました。
- ・今の宮古島と昔の宮古島でこんなにも違いがあって、すごく簡単に人が死んでしまうような大変な時代に空襲や戦争が起きてしまって、友達や親がなくなってしまった人達も多くいるのに、頑張って生きようとしていることに感動しました。
いかに今が、当たり前じゃない幸せな暮らしができてることを改めて実感しました。
誰の得にもならない戦争が二度と起きないような世界になって欲しいです。

鑑賞した朗読劇を通して、宮古島市での戦争について初めて知ったという感想が散見される。沖縄県における平和学習は沖縄島で起こった「悲惨な地上戦」が中心で、宮古島市の児童生徒は沖縄島の戦争は知っていても宮古島市の戦争は知らなかったのがある。宮古島市の戦争を知ることにより、自分の祖父母または曾

祖父母が体験したことかもしれないと考えたであろう。自分の身近に戦争経験者がいる／いた(いる／いたかもしれない)ことを知り、戦争と平和についてより深く考えるようになったと期待できる。また、劇中で使われるマークフツを通して、地域言語の大切さについても考えるようになっている。

4. おわりに

宮古島での戦争をテーマにしたマークフツ(宮古語)朗読劇「黄金文化再発見」の映像を鑑賞した教員・児童生徒のアンケート調査への回答を見ると、演劇が平和教育・地域言語教育の教材として有用であることがわかる。演劇のテーマは児童生徒が身近に感じられる地元で起きたこと・起きていることをテーマとすることが重要である。自分が住んでいない、どこか遠くの地域で起こったことをテーマにすると「他人事」となってしまうが、自分が住む地域で

起きたことは「自分事」として捉えることができるので、より深い学びができるであろう。ことばについても同様で、自分の身近な人が日常的に使用して、自分も聞いたことがあることばを演劇を通して触れることにより、「ことばへの気付き」がより意味を持つであろう。このような効果がある演劇であるので、児童生徒が実際に演じることでより深い学びとなることが期待できる。どのようにしてそのような機会を作るのが課題である。

【宮古島「市民劇」が明らかにしたもの～ 「沖縄戦」の理解と「方言劇」の可能性】

前田 達朗*¹

0. はじめに

本稿は宮古島における「市民劇」についての報告の一部である。ここで「市民劇」と呼ぶのは「黄金(くがに)文化再発見」とタイトルされ2023年2月4日、5日に宮古島市「未来創造センター」で上演された「知られざる沖縄戦～宮古島の戦争の話～」という形で成果発表されたプロジェクトである。その活動全般をめぐり、その題材である「沖縄戦」と、現場では「方言」もしくは「宮古方言」と呼ばれることの多かった琉球語宮古方言の劇中での描かれ方を中心におき整理することで、このプロジェクトの成果を分析しようとするのが本稿の主たる目的である。そしてこの試

みのさらなる可能性にも触れたい。

演劇としての完成度やプロジェクトが地域、特に演者の中でも多数を占めた若い世代に残したものについては報告書の他の部分に詳しいであろうこと、筆者がそれを評価する立場にないこともありあえて踏み込まないが、個人的には凄まじい質量の情熱の集合体が駆け抜け、スタッフやキャストら関係者だけでなく観客も含めたその場に居合わせた人々全ての想像を超えていたであろうものを見る機会を得たと考えている。

1. 「方言」をめぐる事象

今回の市民劇では「方言」が大きな役割を果たしていた。それは量的な存在感でもあり質的にストーリーの展開に関わるものであり、戦争とその傷跡という重たいテーマを扱っているにも関わらず、あるいはそれだからこそ時折織り交ぜられる笑いのきっかけとしても用いられていた。全編を「敢えて」方言で演じられる方言劇は数多くあるが、今回の市民劇はそれが目的ではない。例えば2021年に沖永良部知名町で上演された方言劇は「標準語」の字幕が用意された*²。これは技術的な問題というだけでなく地域語の継承が途絶している琉球語地域に共有されている問題であろう。この現象からも「内地」と呼ばれる日本語の地域方言とはそもそもの言語状況が異なることが明らかだと考える。

ここで「方言」とするのは琉球語宮古方言のことである。なぜ「」の中に入れるのかについて筆者の立場を明らかにしておく必要があるだろう。琉球(諸)語をめぐる研究についてまわるこの

問題であるが、議論は終わっていない。奄美から与那国までの琉球列島で話されている(いた)言語群-琉球諸語を日本語の方言と呼ぼうとする人々と、独立した言語であることを認めるべきだと主張する人々双方がいることは認知した上で、政治的な思惑はともかく、相互に理解が困難な言語をそれぞれ「方言」と呼ぶことには無理があること、世界の少数言語話者を取り巻く状況と琉球諸語の地域には共通する部分が多いことなどから、筆者は琉球語の宮古方言と呼ぼうとするのである。ただ「琉球語という独立した言語がある」という考え方はその言葉が話されているとされる地域でも現在のところ広く共有されているとは言い難い。このことこそが琉球諸語が継承されなくなったことの始まりと今を表象しているのだが、琉球列島各地で普通名詞として自方言をさす～方言～とは別のものであることを示すために「方言」とする。

1-1 「方言」の存在感

今回の市民劇では「方言」の割合が台本での発話回数のペースで三分の一を超えている。

この際何を「方言」とするのかという問題が出てくる。宮古のアクセントで話される日本語もある種の方言*³であることは間違いない。混同を避けるために学術的とは言いにくいのだがそれを「宮古アクセント」と呼び前述の通り「マークフツ」と呼ばれることもあるものを「方言」とする。量的なものだけが演

劇という表現手法において重要であるとは考えないが、今回の市民劇ではまず量的な「多さ」が「方言」の存在感を増していた。この点については今回市民劇の演出と脚本を担当し、制作側の中心となった末吉功治も認めている*⁴。比較が適当であるかはともかく、「方言劇」と銘打って制作された同じ末吉の手による2018年に与論島で上演されたもの*⁵に比べてもその割合と役割は変わっていたと言える。同地での2017年の上演

作は本土からの脚本家の手によるもので「方言」(この場合は与論語、もしくは琉球語と与論方言)は制限されていた*6。二作目では脚本のコンペが行われ末吉の脚本が採用され「方言」の扱われ方が劇的に変化した。脚本はまず全編が与論語に翻訳されたが、今回同様の市民劇を作り上げていく過程の中で漁師の一部と与論島では「ヤブ」と呼ばれるユタ、そして老人と特定の集団・個人の話すものになっていた。ストーリーの展開上重要な部分においては翻訳するような説明的なセリフもあった。しかしながら脚本家の交代による「方言」の存在感は末吉自身が沖縄出身であり「しまことば」への個人的な思い入れや経験*7が投影されていると考えられた。今回は「市民劇」とされていたため「方言」を前面に出す必要はなかったのでは

るが、こうした作り手としての末吉の姿勢が脚本や制作の姿勢に色濃く出ていると言える。特にエンディングでの女性の「ニガイ」～願い、祈りの言葉の長台詞は強く印象的であり、物語全体を象徴し完結させる重要なものであった。量的なものだけでなく作品全体の在り方をも問う役割を「方言」が果たしたことは間違いない。事後の映像などには日本語訳が付されているが、2回の上演の現場で「わからないこと」がこの市民劇を見た人々の理解の「妨げ」になったとは思えない。むしろ全てがわからないからこそ「刺さる」(末吉談)ものでもあった。この点演出上の効果でもあったと言えるだろうが、これまで「観客にわからないであろう」ということで忌避されてきた「方言」の役割の可能性を見ることができた。

1-2 言語社会としての宮古島の投影

今回の市民劇では舞台上に三つの言語バラエティーが見られた。繰り返しになるが本稿でこれまで「方言」として来た琉球語宮古方言、現行の方言とも言うべき宮古のアクセントで用いられる日本語と東京周辺のアセントと言い回しである。これは表現の手法として企図されたものなのかと言う疑問が筆者にはあった。とりわけ個人的には「劇中劇」にも見えた女子学生が登場するシーンは受け取り手によっては違和感を持ちえたかもしれない。それは彼女たちのあまりにも鮮やかな東京語(標準語ではなく)*8に原因があったことは間違いない。また「母親役」の二人の演者のアクセントも異なっていた。作り方としては後者の二つを揃えることでより「方言」を際立たせることも考えられた。

末吉によると、それぞれのセリフのアクセントはそれぞれの演者のそもそも持っているものを尊重したとのことであった。当初はセリフを宮古アクセントにすることを考えたが、劇として作り上げるには「優先事項」ではないと判断された。スケジュールの問題、そして市民劇であることの限界でもあった。特に女子学生のシーンでは表現しなかった1945年当時にも間違いなくあったであろう青春の輝きを「生き生き」と演じてもらうことに演出意図は集中され、そのため彼女たちが普段から使っている東京語が最も適していると考えられた。これもある種の演出意図となるわけである。確かに「訛り」が出ることはほとんどなく、のびのびと演じられていた。彼女たちの言語意識・言語態度については実際のインタビューにゆずるが、筆者が観察した限りにおいてもそれらアクセントや言い回しも含めた東京語は彼女たち同士の日常語であった。

言語に非常に敏感な演劇と言う表現手法が今回はからずも

明らかにしたことは現在の宮古島では三つの言語変種が話されていると言うことである。日本語と琉球語の接触に因って発生した言語体系、例えば沖縄島で「ウチナーヤマトウグチ」と総称されてきた「新しい方言」は日本語からも伝統的な琉球語沖縄方言からも「正しくない・汚い・ガラが悪い」などの負のイメージを負わされてきたが、特に戦後世代の「ウチナンチュー」が自らのアイデンティティを表現する手段として広く使われるようになって来た、と言う総括の仕方はこれまでのところは通用してきたが、若い世代はこの想定の外側にいる可能性があること(もちろん個人差は含みつつも)が示されたと考ええる。

このことが問いかけることは二つあると考える。これまで運動家や研究者は「伝統方言」の喪失を問題視し復興や継承の研究や運動の対象としてきた。本稿でも宮古の「方言」を問題の中心に据えてきた。そのこと自体はこれからも取り組むべきものであることは今のところ揺るがないが、これまでいわば「垂流の方言」とでも言うべき扱いを受けることもあった言語変種たち、ここでは宮古の「新しい」方言がもはや新しいものではないと言うことも確認しなければならない。そこに現れてくる語彙やアクセントは若い世代が日常語とする言葉とかつて話されていた言葉を繋ぐものではなかったのかと言う疑問が浮かぶ。この変種が継承されないことはさらに「方言」との距離が開くことになるのではないかと言うことにもなる。言語の動態を把握しなければならない言語研究が「琉球列島の言語状況はこうしたものだ」と言う定型を当てはめそれで安心していただけではないか、筆者もその中にいたのではないか、と言うことを問い直す必要を強く感じた。

*1 大阪産業大学経済学部 *2 南海日日新聞2021年2月25日付 web版 <https://www.nankainn.com/news/culture/>

*3 真田信治などが提唱する「ネオ方言」がこれにあたると思われる *4 2023年2月14日のインタビューによる。以下引用も含めて同じ。

*5 「空亡」,2018年12月に上演された「方言劇」前田(2019)に詳しい *6 前田(2018) *7 前田(2019)

*8 東京周辺の若者言葉として常に新しく産生される口語表現は「標準」とされる例えば日本語教育などで用いられる規範からは離れたものである。

2. 沖縄戦の理解の枠組みへの提言～「市民劇」ができたこと

今回の市民劇は「知られざる沖縄戦～宮古島の戦争の話～」とタイトルされた。このうち「知られざる」と言うのは「宮古も戦争に巻き込まれていたと言うことは知られていなかった」と言う意味で間違いではないだろう。

そこで「知らなかったのは誰なのか」という問題が出てくる。その時代を実際に生きた人々の数が減る中で伝えられて来なかったのか。この市民劇が下敷きにした「沖縄戦」の枠組みを再検討することでこの市民劇が伝えたものを考える。

2-1 「沖縄戦」の「理解」

1945年の沖縄戦についての理解は米軍の上陸とその前の空襲艦砲射撃と日本軍の横暴や集団自決による多大な民間人の犠牲といったことで語られてきた。残念ながら言うべきか、沖縄の内と外では当事者性と言うことを差し引いても理解に差があると考え、あまりにも悲惨な沖縄島とその周辺離島での事実を終始していることは事実であろう。今回「市民劇」を理解するにあたり筆者自身もう一度沖縄戦の資料にあたる中で確認したことは「沖縄戦」＝「地上戦」であり、それぞれの市町村史などでそれぞれの地域的な特徴が描かれることはあっても総論的なものには限界があることがわかった。沖縄戦は沖縄(本)島とその周辺離島で起こったこと、とある種の「矮小化」が起こりそのことを受け入れていたことを確認する機会となった。これは沖縄出身で沖縄戦についてももちろん無関心ではなかった脚本家末吉においても同様であったとのことである。宮古の戦時のことについて「知らなかった」のは内地の人間だけではなく沖縄でも(宮古出身者などを除けば)一般的なことではないかとコメントする。末吉は宮古の戦争を描くため資料にあたるのだが、その

記録は地上戦があつて多くの史資料が残る沖縄島周辺とは異なり、宮古についての記述は極端に数が少なかったと言う。筆者自身いくつかの資料にあたることで言わば追体験をすることになるのだが、末吉は「言い方は悪いが『派手な』ものに集中している」と言う感じがしたと言う。例えば一般に6月23日に沖縄戦は日本軍の降伏により終わったとされその日に記念式典が行われるが、宮古島では8月の「終戦」まで日本軍の抵抗は続いていた。今回の市民劇で詳しく描かれたように宮古島に日本陸軍・海軍が進駐し、飛行場を建設するため耕作地を接收し島の食糧生産を止め人々を飢えさせた上に数少ない食料まで奪う。三つの航空基地は米軍の格好の攻撃目標になり「沖縄戦」が終了しても終戦まで空襲が続いた。今回の市民劇に先立つ2021年度の「朗読劇」は「沖縄戦」の枠組みを問い直す作業の始まりであったと言える。

宮古島は確かに沖縄県に属しているが、「沖縄戦」と呼ばれるものは沖縄県で太平洋戦争末期に起こったすべての事象を指しているのではないことは明らかである。

2-2 「宮古島の戦争の話」が提示したもの

今回の公演が地元宮古島に与えたインパクトは小さなものではないだろう。つまり宮古島には宮古島の戦争があり、宮古島の人々でさえその外側にいることは難しいと想像できる「沖縄戦」の理解と解釈とは別のものを新しい形で示すことができたと言えるからである。「沖縄戦」の描かれ方が沖縄(本)島中心であること、あるいはその情報量だけで他を圧倒してしまうことについて触れてきたが、誤解はないだろうがその正当性を問おうとしているのではないことは付け加えなければならない。しかしそのことである種の制限がかかっていることもまた事実である。末吉

は自身が知らなかったことで予断があつたことも付け加えている。「離島は大したことなかったから話が出て来ないのだろうと思っていた」

広島や長崎の話も絡めて彼は自身が知らなかったことを隠さず話すのだが、同時にそうした理解や認識が沖縄の中でも多数派であろうことにも言及している。「沖縄」の内側でもと言うべきか、あるいは地上戦とそれをめぐる記憶と記録の巨大さ故にと言うべきか「沖縄戦」と「沖縄(の色々な島)で起こったこと」は別であると言うことが今回の演劇という手法で示された意義は大きい。

3.おわりに～「市民劇」あるいは「方言劇」の可能性

数多くの事例を積み重ねてきた「市民劇」の意義はこれまでも多く語られてきたであろうが、今回の宮古島でのプロジェクトは地域言語を維持・継承する手段として、あるいは習得したものの表現の場としての可能性は今回の宮古島市民劇でも十分に示された。制作側の挑戦も成功し「方言で演じること」が手段を越えて目的化しているような方言劇とはまた違う、「わからないだろうから」と設定されてきた限界を越える方法を示したと言える。

また演劇のメディアとしての役割も認識できた。これはもちろん特に新しいことではないのだが、演じる側ももちろん見た側も「宮古島の戦争の話」についての新たな認識を得たことは間違いない。「沖縄戦」の問い直しは、これまで既定のものとしてきた事実を疑うことであっても、その悲惨さを語り継いできた様々な人々の努力を損なうものではないはずだ。「空襲しかなかった」ことを「大したことがなかった」としてしまうことが間違っていることはいうまでもない。「宮古島の戦争の話」はマ

リアの蔓延などもあわせ日本本土ではなかったことであり、無意味さ悲惨さ、弱いものが犠牲を強いられるといった戦争の本質を十分に語りうるものであり、それらの強弱や大小などの比較こそが最も無駄なことだと信じる。

またここで述べてきたような今回のプロジェクトの成果は、宮古島の外への発信がかなえばさらに大きなものになること、あるいは完結することは言うまでも無い。地元での再認識にも十分な価値が見出せたが、宮古島にはこのような言葉があり、こうした「戦争」があったことを伝えること、それは沖縄県内だけでなく、「沖縄本島」あるいは那覇周辺と他の島や地域の発信力の差を考慮に入れず、沖縄島のことが分かれば沖縄がわかったと言うような「日本」からの単純化された眼差しでの「沖縄」認識を変える力の一つになることが考えられる。

「知られざる」としなければならぬ現状を変える力が演劇にはあると今回の宮古島市民劇の成功に考えさせられた。

参考文献

- 海野福寿1987「恨-朝鮮人軍夫の沖縄戦」河出書房
- 大田昌英2014「写真記録沖縄戦」高文研
- 沖縄の戦跡と軍事基地編集委員会2007「沖縄の戦跡と軍事基地」かりゆし出版企画
- 月刊沖縄1978 記録写真集「沖縄戦と住民」
- 具志頭村史編集委員会1991「具志頭村史 第二巻 通史編」具志頭村
- 久米島の戦争を記録する会2021「沖縄戦 久米島の戦争」インパクト出版
- 青春を語る会編2006「沖縄戦の全女子学徒隊」pp198-203
- 富村順一1981「皇軍とアイヌ兵」JCA出版
- 中城村沖縄戦調査編集指導委員会 2022「中城村の沖縄戦 証言・資料編」
- 名護市史編纂委員会2016「名護市史 本編3 名護やんばるの沖縄戦」
- 原剛2021「沖縄戦における住民問題」錦正社
- 平良市史編さん委員会 1979「平良市史第一巻通史編」第7章
- 前田達朗2018「諸鈍シバヤ・与論島『もうひとつのアジニッチェ伝説』」
- 琉球大学国際沖縄研究所
- 前田達朗2019与論島「方言劇」地域社会へのインパクトと『旅人～たびんちゅ』の役割」琉球大学国際沖縄研究所
- 吉浜忍2017「沖縄の戦争遺跡」吉川弘文館

【 ミャークフツ劇に関する アンケート調査結果の分析 】

石原 昌英

1. はじめに

2023年2月4日・5日に宮古島市未来創造センターの多目的ホールにおいて、市民参加型のミャークフツ(宮古語)劇が上演された。本稿では会場で実施したアンケート調査の結果を分析する。昨年度の朗読劇と異なり、今年度は本格的な演劇として上演された。また、観客にはマスク着用及び手指消毒等の感染対策をしたうえで全ての観客席が開放され、両日とも満席であった(観客スペースの前の方に椅子を追加した)。2日間の観客総数(延人数)は445名で、その内一般観客が394名、招待者・関係者が51名であった。なおアンケート調査への協力者(回答者)は316名であった。

ミャークフツ劇上演から1週間後に演者として劇に参加した5名(10代3名、50代1名、70代1名:10代は小学生、中学生、高校生各1名)を対象にインタビュー調査を実施した。以下では、インタビュー調査の結果も加味して、アンケート調査を分析する。

アンケート調査は、ミャークフツを維持継承していく取組としてのミャークフツ劇の効果を調べるための質問からなるパート1(琉球大学国際地域創造学部が実施)と戦争証言の継承と市民劇に関する質問からなるパート2(公益社団法人日本劇団協議会が実施)から構成された。アンケート用紙の表面でパート1、裏面でパート2の質問をした。質問項目は下記の通りである。

パート1

- 1)宮古島市の出身ですか。
- 2)「いいえ」の場合、どちらのご出身ですか。
- 3)現在宮古島市に住んでいますか。
- 4)年齢は何歳代ですか。
- 5)ミャークフツのレベルはどの程度ですか。
- 6)どの程度ミャークフツを使用していますか。
- 7)宮古島市の子ども達にミャークフツを使えるようになってほしいと思いますか。
- 8)今日のミャークフツ劇の内容をどの程度理解できましたか。
- 9)今回のような住民が参加するミャークフツ劇の上演はミャークフツの保存継承に効果があると思いますか
- 10)質問9の回答の理由は何ですか。

パート2

- 1)本日の公演は、何でお知りになりましたか。
- 2)本日の公演チケットは、どちらでお求めになりましたか。
- 3)宮古島で起こった戦争について、証言を読んだり、聞いたりしたことがありますか。
- 4)慰霊の日などの平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会がありますか。
- 5)戦争証言を劇にすることで、平和学習になると思いますか。
- 6)今後、どのような公演を鑑賞したいと思いますか。
- 7)本日の公演の感想をお書き下さい。

なお両パートとも最後の質問は自由記述回答である。以下にパート1とパート2の回答を分析する。なお、質問項目は昨年度に実施した調査と同じであったので、数値が変わっただけで、

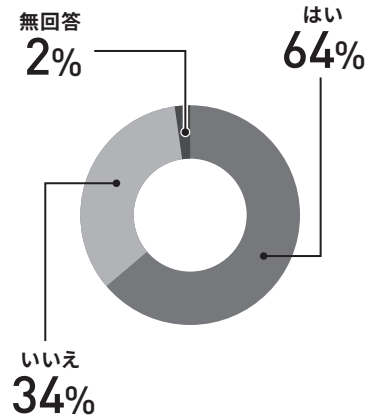
昨年度の報告と同じような分析・記述が多いことを断わっておきたい。(パート2の質問6は昨年度のアンケート調査では質問項目に含まれていなかった。)

2. パート1の回答の分析

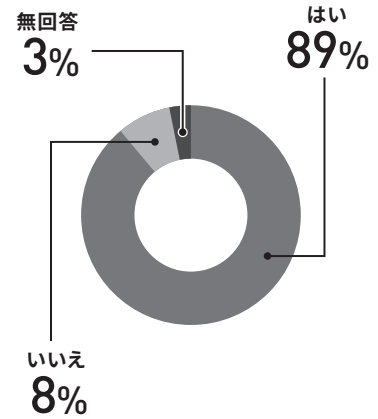
パート1では自由記述も含めて10の質問をした。まず質問1と質問3についてであるが、回答者の64%が宮古島の出身で、回答者の89%が宮古島在住である。

宮古島市出身でない者の割合は、宮古島市以外の沖縄県内市町村の出身者、県外出身者、外国出身者が全回答者の34%であった。外国出身者は台湾出身の1名である。宮古島市以外の出身者では沖縄県内出身者より県外出身者の方が多かった。なお、出身地を回答しなかった者も複数名いる。また、回答者の89%が宮古島市在住であるので、宮古島出身でないものも現在宮古島市に住んでいる。次に回答者の年齢であるが、10歳代から80歳代以上に渡っているので、様々な年代の観客が市民劇を観たことがわかる。

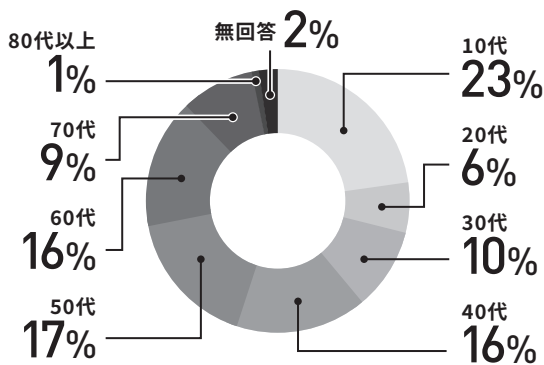
1 宮古島の出身ですか。



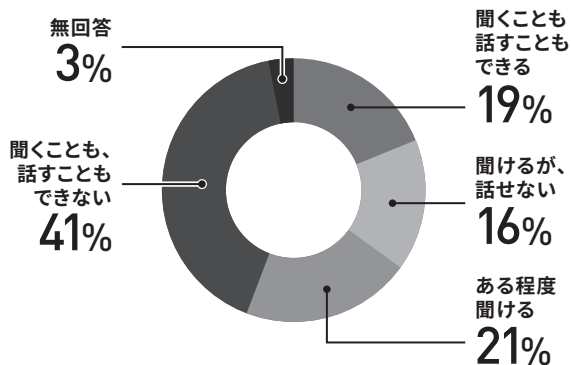
3 現在宮古島市に住んでいますか。



4 年齢は何歳ですか。



5 ミャークフツのレベルはどの程度ですか。



次に回答者のミャークフツ運用能力である。選択肢は「聞くことも話すこともできる」「聞けるが話せない」「ある程度聞ける」「聞くことも話すこともできない」の四つである。なお、この選択肢は琉球新報社が5年ごとに実施している「沖縄県民意識調査」で使われている選択肢と同じである。「聞けるが話せない」または「ある程度聞ける」と回答した者がいわゆる「潜在的話者」に当てはまる。文法知識を持っていないと、ミャークフツを聞いて理解することはできないので、潜在的話者はミャークフツの文法知識を持っていると言える。何らかの理由があって、話すことができないのであるが、この潜在的話者がミャークフツを話せるようになり、話すようになると、「聞くことも、話すこともできる」者の数が増加する。言い換えると、この回答をした者がミャークフツを発話する機会をいかに設けるのかが課題となっていると言える。

回答で一番多いのはミャークフツを「聞くことも、話すこともできない」の41%で、回答者には宮古島市の出身ではない者が含まれていると思われるが、宮古島市出身であるがミャークフツが飛び交う言語環境で育っていないと、ミャークフツの文法

知識を習得する機会がなかった者が多いと思われる。「聞くことも話すこともできる」と回答した者は19%で、10名に2名程度であるので、このデータはマークフツの消滅危機の度合いが高いことを示唆している。一方で、「聞けるが、話せない」または「ある程度聞ける」と回答した者、つまり潜在的話者と言える者が37%いることは、マークフツの再活性化の可能性が残っていることを示している。

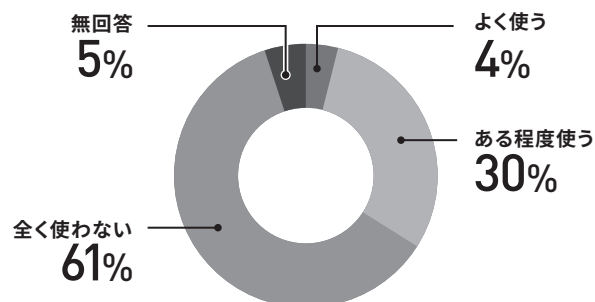
インタビュー調査協力者のうちマークフツを流暢に話せるのは70代の協力者1名のみであった。県外から移住してきて約

25年間宮古島市に住んでいる50代の協力者は、職場である介護施設で日常的にマークフツに接しているため、だんだんと聞いて理解できるようになっている。しかし、マークフツの語句・単文は発話できても、長い文章にすることができないので、会話はまだできない。10代の3名はマークフツを聞いてもほとんど理解できないレベルで会話の中にわかる単語や表現がたまにあるという程度であった。話すこともほとんどできなくて、会話の中に単語を入れることがたまにあるという程度であった。

次に、日常的な使用頻度について訊いた。この質問への回答は沖縄県全体的な特徴と合致している。つまり、地域の言語-マークフツ-を使える者でも日常生活でその言語を使う傾向にはないということである。質問5の回答が示すようにマークフツを話すことができる者は回答者の19%であるが、質問6で「よく使う」と回答した者は4%で、「ある程度使う」と回答したものが30%である。「全く使わない」と回答したものが61%で割合が最も高い。これは、質問5の回答結果からある程度予想できることである。「よく使う」「ある程度使う」と回答したものは合計で34%であるが、その相手はマークフツを話すことができる者、または聞いて理解できる者であることが想像できる。ここから言えることは日常的な生活の場でマークフツを「聞くことも話すこともできない者」がマークフツに接する機会がないであろうということである。ここに学校教育におけるまたは市民が参加するマークフツ劇の可能性もある。劇は非日常の世界であるが、参加者はマークフツの台詞を声に出したり聞いたりすることにより、マークフツに接することができる。劇に参加することができる児童生徒や市民の数は限られているが、少しずつマークフツに接する者の数を増やし、結果としてマークフツ話者の数を少しずつ増やしていくことは可能である。

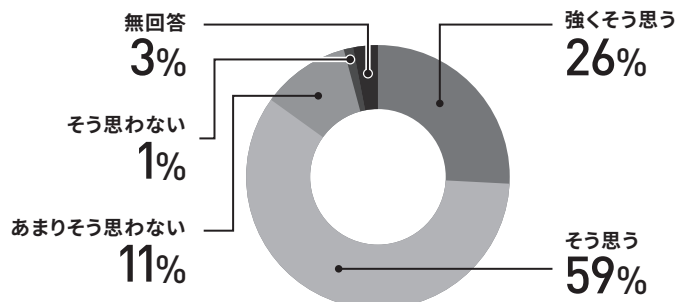
インタビュー調査の結果から、マークフツがだんだんと使われなくなってきたことが示唆された。10代の子ども達は

6 どの程度マークフツを使用していますか。



日常生活でマークフツを使うことはほとんどない。使ったとしても単発的な語句・表現のみで、文として発話することはないようである。70代の協力者は同年代の友人との会話ではマークフツをふんだんに使うが、50代以下の人達との会話では日本語が使われ、地元のことばは単発的にしか使われない。県外出身の50代の協力者は、職場である介護施設においてマークフツを使える人・使う人が少なくなっていると感じている。この協力者はマークフツが衰退し、使われなくなっている現状を憂い「寂しい」と表現した。

7 子ども達にマークフツを使えるようになってほしいと思いますか。

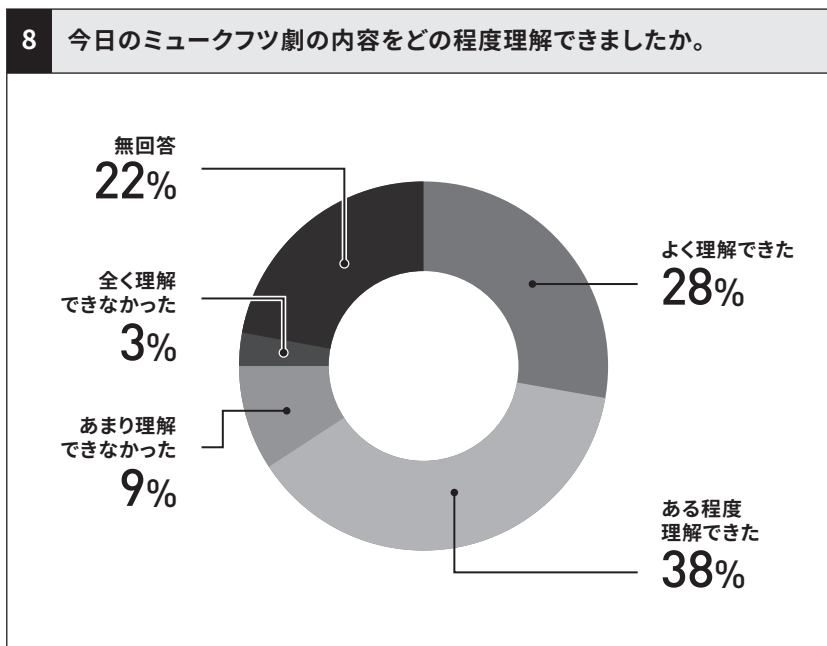


次に、マークフツの継承に関する質問をした。具体的には「子ども達にマークフツを使えるようになってほしいと思いますか」という質問である。子ども達が使うようになって初めてマークフツは継承されるのである。この質問に26%が「強くそう思う」59%が「そう思う」と回答していて、肯定的な回答の割合は85%である。このことから、回答者の大多数がマークフツの継承を望んでいることがわかる。しかしながら、質問6への回答と関連づけて見ると、言語継承は望むが、それに向けた行動は取っていないことがわかる。ここに

見られる「言語意識と言語行動のギャップ」は沖縄県が実施している「しまくとぅば県民意識調査」が示す状況と一致している。このギャップを如何に縮めていくのがマークフツの維持継承に向けた課題の一つである。

70代と50代のインタビュー調査協力者は宮古島市の子どもたちがマークフツを継承して欲しいと考えてはいるが、そのような機会を作ることが難しいことは理解している。また、10代の子ども達もできれば継承したいと思っはいるが、家庭・学校を含め日常生活でマークフツに接する機会はない。しかし、今回の劇に参加して、70代の参加者(インタビュー協力者)から

学ぶことによって、自分達のマークフツ能力が向上したと実感している。日本語にはない単語の発音やイントネーションが特に難しいと感じていたが、だんだんとできるようになってきたようである。50代の協力者はセリフの中にあるマークフツを職場で使ったり、別の言い方を教えてもらったりして、自分の運用能力を向上させることができたようである。10代・20代の若者世代の参加者が練習の場以外(家庭・職場)でも、セリフのマークフツを応用して使うことができれば、さらに運用能力が向上するものと考えられる。このような機会をいかに作るかが課題であろう。

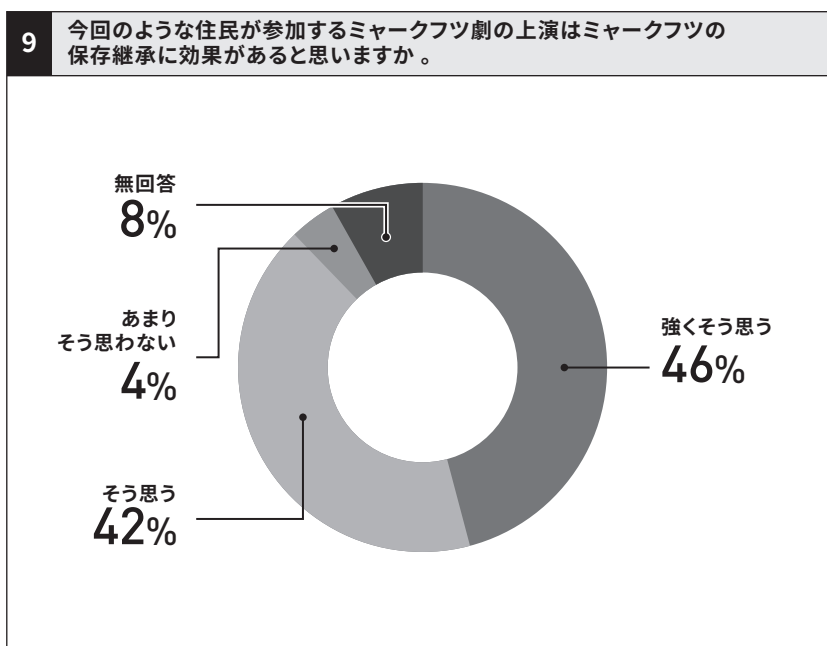


次に、上演されたミュージックフツ劇の理解度について質問した。「よく理解できた」と回答した者が28%で、「ある程度理解できた」が38%であったので、観客の多くが劇の内容を理解したと言える。「あまり理解できなかった」と回答した者が9%あったが、「全く理解できなかった」と回答した者が3%であった。なお、無回答の22%の中に「全く理解できなかった」者が含まれる可能性はある。

選択肢回答の最後の質問はミュージックフツ劇の効果に関するものである。質問は「今回のような住民が参加するミュージックフツ劇の上演はマークフツの保存継承に効果があると思いますか」というものであった。46%が「強く思う」、42%が「そう思う」と回答していて、合計で88%なので、アンケート調査協力者のほぼ90%が、ミュージックフツ劇の効果について肯定的な回答をしている。これは、台詞にマークフツがふんだんに取り入れられているので、観客はそれを聞くことによって、地元の言語に触れることができる。また、演者は練習を通して、マークフツを学習することが可能である。

演者は自分の台詞と他の登場人物の台詞を覚える必要があるので、かなり効果があると思われる。

質問10は質問9の回答の理由を自由記述で回答するものであった。129件の自由記述回答があった。ミュージックフツと劇に関する記述は次のようにまとめることができる。



質問10 (調査者まとめ)

- 日常的にマークフツに接することがないという状況で、劇に参加しマークフツのセリフを覚えることが「唯一の接触機会」となる。
- 演者として参加した子ども達が劇に参加することで、楽しんでマークフツを覚える機会となる。
- 演者として参加した子ども達だけでなく、観劇した子ども達もマークフツに関心を持つようになることが期待できる。関心を持つことで、マークフツを学びたいと思うようになるのではないか。
- 演劇は非日常なので、日常生活で宮古島の文化の中核となるマークフツを使う機会をいかに作っていくのが課題となる。

3. パート2の分析

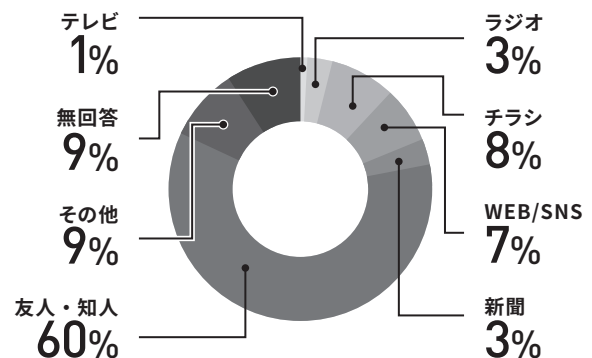
パート2では戦争の記憶の継承や平和学習に関する質問を中心として調査した。最初の2問は上演された市民劇に関する情報とチケットの入手方法に関する質問である。

日常生活がコロナ前の状況に戻りつつある中で、今回の劇が上演された。しかしながら、情報の入手およびチケットの購入は、コロナ禍の中にあった昨年度と同様で、情報は友人・知人から入手し、チケットは出演者から購入したと言う回答が最も多かった。宮古島市には宮古テレビ、FMみやこ、宮古新報、宮古毎日という地域に根ざしたローカルのマスコミがあるが、情報の入手としてはほとんど活用されていないようである。友人・知人からの情報に頼るのであれば、「満席」の観客であっても観客層の広がりと言う観点からは課題として指摘されるべきであろう。

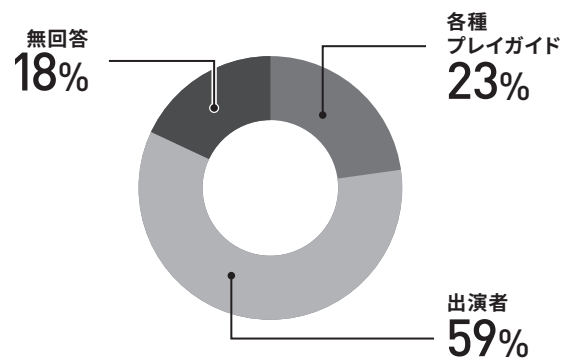
次の二つの質問は宮古島市における「戦争」に関するものである。質問3は「宮古島で起こった戦争について、証言を読んだり、聞いたりしたことがありますか」で、太平洋戦争の沖縄戦に関して宮古島市で起こった「戦争」について知っているかどうか訊いている。57%が「はい」と回答し、32%が「いいえ」と回答している(11%が「無回答」であった)。

質問4は「慰霊の日などの平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会がありますか」というものである。33%が「ある」、13%が「ややある」、22%が「少ない」、20%が「ない」と回答している(11%が「無回答」である)。「ない」「その他」「無回答」を除く68%の回答者が平和学習を通して地元(宮古島市)で起こった戦争について学ぶ機会があると答えている。一方で、肯定的な回答(「ある」「ややある」)の合計は46%であるので、宮古島市民が地元で起こった戦争について学ぶ機会は多くはないと思われる。このことは後述する「自由記述」回答にも表れている。

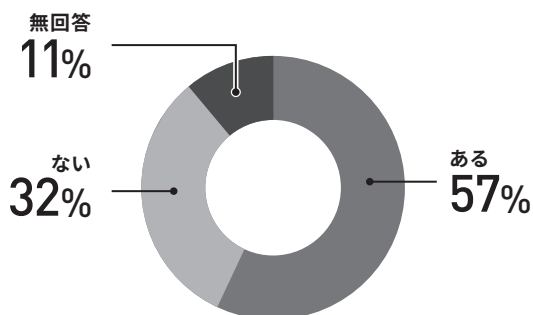
1 本日の公演は何でお知りになりましたか。



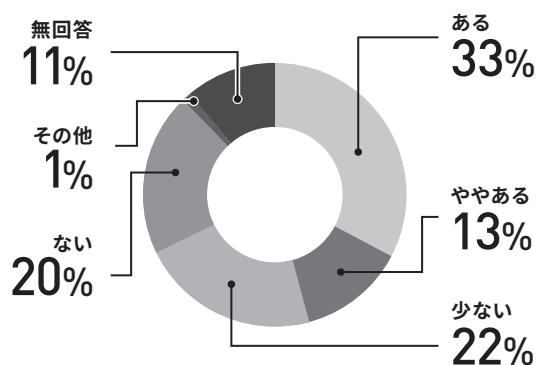
2 本日の公演のチケットはどちらでお求めになりましたか。



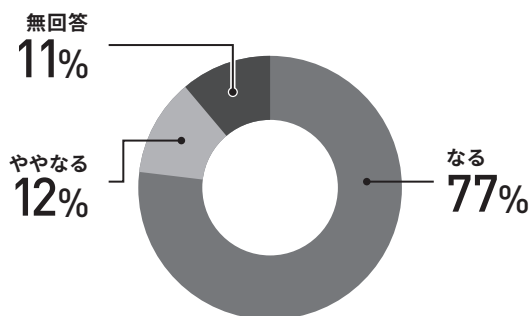
3 宮古島で起こった戦争について、証言を読んだり、聞いたりしたことがありますか。



4 慰霊の日などの平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会がありますか。



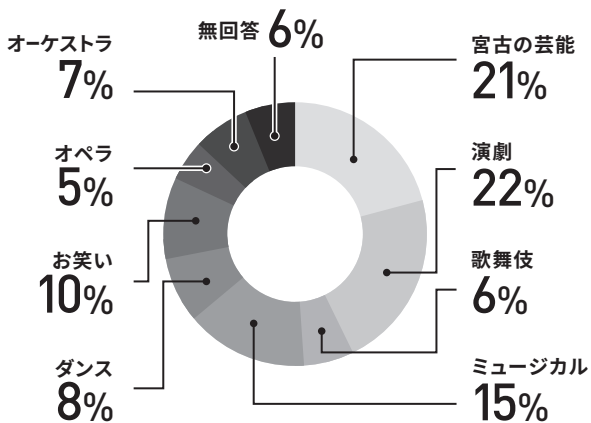
5 戦争証言を演劇にすることで、平和学習になるとお考えですか。



質問5は「戦争証言を演劇にすることで、平和学習になるとお考えですか」という質問である。77%が「なる」、12%が「ややなる」と回答している。このふたつの回答の合計で89%なので、ほぼ全員が演劇を通して戦争について学ぶことは、平和学習になると思うと回答したことになる。

演劇は、戦争を「疑似体験」できるので、証言を聞くことよりは効果が高いと思われる。また、演者として参加することは、その場の「追体験」ができるので、戦争の恐怖・意味のなさを「実体験」として学ぶことができるだろう。「ひめゆり平和資料館」や「沖縄平和祈念資料館」などで書かれた証言や映像を見ることは大切な経験となるが、それは主として沖縄島で起こったことである。宮古島市で起こった「戦争」については、書かれたり、語られたりした証言や遺品で学ぶしかなかったのであろうと考えられる。劇には場面、声(台詞)、所作や効果音が入ってくるので、「戦争」の疑似体験がよりリアリティの高いものになると予想できるので、効果の高い平和学習となると思われる。質問5に肯定的な回答をした観客はリアリティを感じたのであろう。

6 今後、どのような公演を鑑賞したいと思いますか。



選択肢回答の最後の質問は「今後、どのような公演を鑑賞したいと思いますか」というものである。

「演劇」の22%と「宮古の芸能」の21%が最も多い。前者には今回の公演のようなマークフツ劇も含まれていると思われる。宮古島市は民謡や踊を含め「郷土芸能」が盛んである。公演を通して宮古島市の「郷土芸能」を鑑賞することは、宮古島市の「文化」に対する愛着を深めることにつながると期待できるので、このような公演も重視すべきである。「ミュージカル」や「お笑い」については、回答者は「日本語」での公演を想定したであろうが、この二つについてはマークフツを取り入れた公演も可能である。「オペラ」や「ダンス」についてもマークフツを取り入れた公演の可能性もあるだろう。そのことでマークフツの新たな「発表の場」を創造することができると思われる。

最後の質問7は、「本日の公演の感想をお書き下さい」と自由記述回答を求めたものである。146件の回答があった。自由記述は次のようにまとめることができる。

質問7 (調査者まとめ)

- ・ウクライナで進行中の「戦争」と重なり合わせて、「平和の尊さ」に言及したものが多かった。
- ・1945年の沖縄戦において沖縄島で起こったことについては学んだが、宮古島市で起こったことについては学ぶ機会がなかったので、この劇を通して地元での戦争の歴史を深く理解することができたという記述も散見された。
- ・このような劇が宮古島市内の学校における「平和学習」に活用されてほしいという要望があった。
- ・マークフツのセリフがもう少し多くてもよかったのではという要望があった。

146件の自由記述解答からを抜粋したものを下に示す。

70代

ウクライナがあり、宮古島の戦争証言劇、
現実のものとして心にせまるものがありました。戦争反対!!

70代

平和の尊さを改めて強く感じました。ウクライナ戦争が早く終わってほしいです。
方言をずっと後世に残していきたいです。方言ならではの良さがあります。

60代

みなさんの熱演に感動した。宮古であった戦争のことを多くの人に伝えたい。
あらためて平和の大切さをかみしめることができた。

50代

方言をほとんど話せない子供たちがこのような演劇に挑戦することがとっても尊いことだし、
平和への思いを強くもって大人になってほしいと願います。

50代

本当に本当に素晴らしかったです。言葉にならないほど。
録画映像を是非、宮古中の学校で上映して下さい。大人も見るといい。
関わられた皆様に感謝と最大限の敬意を送ります。ありがとうございました。

50代

方言が全然わからなくてもおおよその内容がわかるように工夫されていてよかった。
内容は史実とウクライナが重なり、後半胸がつまる思いでしたが
生き生きとした演技で舞台の世界に引き込まれました。
カーテンコールでの出演者の笑顔ですくわれました。

50代

宮古島の歴史にふれる事が出来て良かったです。

50代

平和学習に活用してほしいと思った。

40代

悲しい出来事だけど目をそむけずにみれたのは
みなさんの笑顔もたくさんあって。
おもしろいこともちりばめられていたからかと思いました。
ありがとうございました。

30代

宮古島での戦争体験というのは今まではあまり聞いたことがなく、資料館で少しふれたくらいでした。沖縄本島での出来事のほうが話題になりがちだけど宮古でもこんなに大変なことが起こっていたとは。文章で読むより、お芝居を観る方が身にしみて涙しました。またこのような機会があればぜひ拝見させて下さい。皆様ありがとうございました。おつかれさまでした。

.....

30代

少し笑ってたくさん泣きました。私たちの祖父母が体験したことだと思うと胸がしめつけられ、苦しくなりました。それと同時に今生きていることに感謝しています。過去の宮古島のことを知りたくなりました。

.....

10代

今までは、宮古島の戦争についてよく分かっていなかったけど、こういった形で見ることができて良かった。みんな上手だった！

.....

年齢不明

とても素晴らしい公演で宮古島の子ども達の演劇の高さを感じ、プロ並みでしたね。宮古島の戦争の悲劇を改めて感じ、先祖達の大変な悲痛をのりこえ、今、ここに私達の命、幸せがあることは先人達がのりこえてきたお陰と感謝の思いでした。今日はありがとうございました。

.....

70代

とても感動です。素晴らしい舞台でした。願わくばもう少し方言を多用して欲しかったです。

.....

60代

感動した!!よかった!!足元の歴史をほりおこすことは大切。これからも宮古の戦争の歴史を後世へ伝える演劇を期待しております。

.....

50代

宮古方言による劇、素晴らしかったです。これからもぜひ続けてください。

.....

40代

両親が宮古島出身で私は東京生まれ育ち、小学生の頃から毎夏おじい、おばあの宮古島の家遊びに来ていました。大人になり、宮古島のことをもっと知りたくなり、たまたま昨日宮古島に来たところこちらの公演を知りました。自分には宮古の血が流れているんだなぁと不思議と感じます。宮古の人々の温かさが好きです。この公演を通してより宮古島のことを歴史を知りたくなりました。素晴らしい公演で感動しました!!!!宮古に住んでいる父や親戚にもいろいろ話を聞きたいと思います!ありがとうございました!!!

.....

40代

あまり知られていない宮古島の戦争。これからももっとこんなことがあったと教えてほしい。学校でも、平和学習で知らせてほしい。とても感動しました。ありがとうございます。祖父母の経験したことを知ることができました。

40代

演技も演出もすばらしかったです。
宮古で演劇を観れる機会がうれしく思いました。
平和について普段話しづらいのが最近の空気ですが
演劇を通して考えるきっかけになると感じました。
ありがとうございました。

20代

弟ばかりずるい!と言ったシーンが特に印象的でした。
戦争で、どの立場の人も苦しんでいたのが伝わってきて涙が出ました。

10代

普段あまり知ること、知る機会の無い戦争中の宮古島の姿を
当事者の気持ちにそった演劇という形で学べて良かった。
次の公演も楽しみに待ってます!
素敵な演劇ありがとうございましたー!!

10代

感動しました。宮古島で起こったことはあまり知る機会がないので、
今回劇を観ることができて良かったです。

10代

すごく勉強になったし、若い層や、
宮古島市出身ではない友人が方言を話している姿に感動しました。

10代

今回は友達が出演するので見に来たが、
とても面白く、最後まで気持ちが引っぱられた。
沖縄の地上戦のことは学校で学ぶが、宮古島のことはあまり知る機会がないので
知れてとても良かったし、マークフツについても興味を持つことができた。
どんどん出来事が過去のことになり、体験した人の話を実際聞くことができなくなる中で、
伝え続けていくことは本当に大事だし、自分からも学ぶ姿勢を取りたいと思う。
演技力もさることながら、歌も良かった。お疲れ様でした!

4. おわりに

調査者は、2月4日・5日の両日の公演を観ることができた。台本では、マークフツのセリフには日本語訳が付されていたので、マークフツの意味を理解することができた。しかし、台本を見ることができなかったため、マークフツのセリフの意味を理解できなかった観客も多かったようである。対策の一つとしては、字幕をつけることであるが、舞台上に集中できない可能性があることが弱点である。前もって台本をネット上で公開することも考えられるが、著作権等の課題がある。劇の最後の「ふみおばー」のマークフツでの「祈り」は全く理解できなかった。案内チラシに日本語訳が書かれていたが、この部分だけでも日本語訳を配布してもよかったのではないかと思う。自由記述に似たような指摘があった。

日常的にマークフツに触れることができないという言語環境

では、残念ながら、地元のことばを習得する機会がなく、マークフツの衰退に歯止めをかけることは難しい。しかしながら、劇に参加することで、擬似的な日常でマークフツに触れることができる。インタビュー調査から分かったように、劇に参加して、セリフを覚えることで、マークフツの運用能力が向上することは明らかである。このような機会をいかに増やしていくかが課題であろう。

また、劇は「平和学習」に効果的であることはアンケート調査の結果から明らかである。宮古島市民が自ら証言等を通して戦争の歴史を学び、それを題材として台本を作り、劇を手作りすることは可能であろう。その際に、台本の構成、セリフを含む演技については、専門家の指導を受けてより「上質」の劇を市民が上演することで、観客に訴えることができる。

市民劇が気づかせてくれた黄金文化

宮古島市教育委員会
教育長 大城 裕子

O SHIRO YUKO

宮古島市民劇「知られざる沖縄戦 ～宮古島の戦争の話～」の初日公演を拝見しました。たいへん素晴らしい舞台に感銘を受け、公演後はその余韻と共に様々な思いが去来し、多くの気づきもありました。

舞台は真珠湾攻撃の直前から終戦までの宮古島。方言の禁止を含めた戦前の学校教育や、島の暮らしの様子が描き出されるところから始まります。前半は島の人のおおらかさと共に方言の響きを生かしたユーモラスな場面も多かったのですが、徐々に人々が戦争にかり出され、巻き込まれ、次々に命が失われてゆく悲惨な戦争の姿が突きつけられます。玉音放送ののち、宮古方言による女性の祈りで幕は閉じられますが、その言葉の一つ一つが心に響くものでした。

まずこの舞台で興味深かったのは、宮古方言の扱いです。昨今、方言の継承は重要課題となっていて、宮古島で生まれ育った人でも方言が聞けない、話せないということは珍しくなくなりました。ところが公演後、若い世代や県外出身の来場者に聞いてみると、舞台上で話された方言は直接わからなかったが、その場面、場面の状況からおおよその内容がわかった、ユーモアが伝わったとのことでした。日常的に方言を使う機会が少なくなっても、このような舞台を通して方言の良さ(黄金文化)を再発見し、共有することができるのだと気づかせてくれました。

宮古における戦争の歴史の再発見もありました。劇中でも紹介されていましたが、戦争に関する資料は終戦前後、故意に破棄されてしまい、ほとんど残っていません。

本格的な地上戦がなかった宮古島では、つい戦争の史実が忘れられがちです。この舞台は、昨年度から資料収集だけでなく、年配の方々に丁寧な聞き取りを行い、ワークショップで議論を交わして、創り上げられています。想像力で補った部分もあろうかとは思いますが、宮古における戦争の姿に迫る舞台に仕上がっていました。歴史に目を向ける良さ(黄金文化)です。

戦争は人の命を踏みにじるものです。島の人々がいかにおおらかでユーモラスであっても、舞台後半は心を激しく揺さ振られるものでした。宮古の史実とウクライナでの現実が交錯し、舞台を締めくくる祈りが心の奥まで響きました。とても大事な宿題をもらったのですが、上演直後、カーテンコールで姿を見せてくれた出演者の笑顔には救われる思いでした。舞台づくりのために研究し、議論し、練習を重ねて演じ、メッセージを伝えきったという裏打ちのある笑顔だと感じました。公演パンフレットに紹介された創作過程を拝見してそのように感じた次第ですが、このようなプロセスこそが教育であり、人づくりではないか、また、このような舞台芸術をとおして演者と受け手共に黄金文化の担い手として育成されていくのではないかとこのことを改めて感じました。

黄金文化を再発見する機会を与えていただきました文化庁、日本劇団協議会、TEAM SPOT JUMBLE、劇団スーパー・エキセントリック・シアター、出演された宮古島市民の皆様、そして観劇された皆様に、衷心より感謝申し上げます。

演劇は素晴らしいツール

劇団びん座
仲宗根 優

NAKASONE MASARU

ひと昔前、演劇というと沖縄本島から劇団が宮古島をよく訪れていました。沖縄芝居といわれるその芝居は、そのほとんどの台詞がウチナーグチ(沖縄口)で語られるのが当たり前でした。宮古島での公演ということもあってか、芝居の中に一言、ふた言、宮古方言で台詞を話す場面がありました。その時は今まで静かだった会場がどっと沸いたのを覚えています。

もしかしたら宮古島の人達は、宮古方言と笑いに飢えているのかもしれないと思ったものです。それを裏付けるように宮古島市文化協会主催の「鳴りとうゆんみゃ〜く方言大会」は、なかなかチケットが取れないほど大人気のイベントになっています。

そしていつの日か、宮古島オリジナルの芝居が出来るといいなと夢見ておりました。それから十数年、宮古島にも子ども劇団がいくつか誕生しました。そして2015年10月に芝居好きな仲間と一緒に「劇団びん座」を結成しました。劇団名のびん座は、宮古方言のピンザ(ヤギ)から名付けました。当劇団は、宮古島の人々を主人公に何気ない日常を宮古言葉で面白おかしく表現する芝居を目指しています。2016年3月の旗揚げ公演を皮切りに年に一度の公演を現在まで続け、おかげさまで多くの市民から好評を得ることが出来ていることを嬉しく思っています。

演劇を観たり演じたりする機会の少ない宮古島において、市民自ら舞台を創造し、その喜びや感動を共有することはとても素晴らしいことだと思います。

今回、上演された宮古島市民劇「知られざる沖縄戦〜宮古島の戦争の話〜」は、戦時中の宮古島の人々が過酷な状況にありながらも必死に生きようとする思いや苦悩をプロの役者を含めた小学生から一般の市民が見事に演じ、魅了してくれた舞台でした。一般的に沖縄戦というと、そのほとんどが沖縄本島や周辺離島の出来事であり、戦時中の宮古を含め先島の現状は殆ど伝えられていませんでした。

現代の私達があの時代にタイムスリップし、当時の宮古島の人々の思いを共有、追体験できたことは、とても有意義だったと思います。まさに「黄金(くがに)文化再発見」の旅でもありました。そして、笑いあり、涙あり、観客を感動の渦に巻き込んだ舞台を魅せてくれたキャスト、スタッフに感謝いたします。

演劇は心を豊かにする「素晴らしいツール」だと、あらためて感じさせられました。

さて、次回はどんな「黄金(くがに)文化再発見」の旅へと私達をいざなってくれるのか、とても楽しみです。

市民劇参加者の感想

今回市民劇に参加させて頂いて、改めて「戦争」とはどういうものだったのかということを考えさせられました。あの時代を生きた方々の深い悲しみや怒りを、資料などではなく「生」で体感していただくことに意味があるのだと思います。今の時代だからこそ、このような経験ができる機会を増やしていくべきだと思います。(出演者・女性)

出演するにあたりプレッシャーとの戦いはありましたが、きっと私達が伝えたい思いを感じ取ってくれる方がいらっしゃる!これは私達の使命だ!!!という思いを持ち演じる事ができました。プロの皆様にご指導頂き、学ぶ事ができたことは、私の財産であり宝物です。ありがとうございました。(出演者・女性)

今回息子が劇に関わらせて頂いた事で、当たり前の事がどれだけ幸せな事なんだろう?と、改めて思いました。観た方々も戦争はあってはならないという事や、生きている事への感謝など、きっと感じられたに違いないと思います。この様な劇を通じた活動が継続されて、皆が平和を望む気持ちを持ち続けていければと思います。(出演者の保護者)

方言で演劇をするにあたり、実際に戦争を経験している年代の方にも方言の話し方を習いました。方言を自分の言葉として演じることで、方言という文化と、戦争という出来事の伝承に、演劇が向いていることを強く感じました。(出演者・男性)

「黄金(くがに)文化再発見」宮古島市民劇に出演した喜びと 宮古方言「みやーくふつ」を劇に取り入れた今後の継承活動に期待

(一社) 宮古島市文化協会副会長
方言部会長 砂川 春美

SUNAGAWA HARUMI

黄金言葉「黄金なむざ」「すななぎ黄金」品行方正な人になるようにという祖母の教えのもとで育ったことで、「黄金文化再発見」と言うタイトルに引き込まれ、昨年朗読劇に出演する事になり、戦後生まれで、祖母から宮古島で起きた食糧難やマラリアで苦しんだ悲劇は聞かされていましたが、沖縄戦についても平和学習で聞くことはあっても、宮古島で起きた悲しい出来事、全体像を把握する事は出来ませんでした。

戦争体験者の高齢化もあり継承も難しく継承が急務であった。戦争体験をされた方の証言を基に、ワークショップやディスカッションを重ね作り上げた演劇を通して、戦争体験をしていない世代の私たちが宮古島で起きた戦争悲劇を、そして悲惨な時代を生き抜いた先達たちが作り上げたこの平和を、演劇を通して体験、共有する事で次世代へ引き継いでいくことが出来たと思います。

また、「みやーくふつワークショップ」で宮古島のことば(みやーくふつは「文化」)である中舌母音が多く難しい「みやーくふつ」を参加者同士で共有し、演劇を通して触れることは「みやーくふつ」に関心を持ち、話してみようと思うきっかけになれたと思います。

方言継承活動をしている私にとって大きな希望と継承方法のヒントを得ることが出来ました。

きっと、この島で生まれ育った魂と誇りを後世に繋げていけることでしょう。

また、祈りの島である宮古島の畏れ多い神々がこの演劇を通して「平和」と「方言」の大切さの願いを受け取って頂けたことと思います。

改めて、ご縁のあったすべての皆様に感謝申し上げます。

今回限りで終わることなく、「みやーくふつ」を通して多種多様な角度から文化、平和を未来へ繋げて行きましょう。

市民劇参加者の感想

今回、初めて市民劇に娘が出演してみて感じたことは、宮古島でこんなにも悲惨なことがあったことに驚きが大きかったです。また今ある集落や地域の関係性も深く知ることができました。これは小、中学校でも是非見せ、知るべきだと強く感じました。(出演者の保護者)

劇を通して戦争を知らない人たちにも伝えられてよかった。みんなと一緒に劇をして楽しめてよかった。(出演者・小学生女子)

ただ話を聞くより劇を通して疑似体験出来たことは、子ども達の戦争についての深い理解を促したと思う。また劇自体も良い経験になったと思う。次の機会があれば私も参加したいと思った。(出演者の保護者)

あまり馴染みのない戦争や方言について学べたのは良かったと思う。また、演劇自体については、キャラクターの動きの理由を考えてセリフや動きをつけていくのは普段はあまりしない逆算的な思考法だったので面白いと思った。人間の行動原理を考えるいい練習になったと思う。(出演者・高校生女子)

人と人をつなぐ物語

TEAM SPOT JUMBLE

喜舎場 梓

KISHABA AZUSA

沖縄県には慰霊の日が制定されています。地上戦での日本軍の組織的な戦闘が終わったとされる6月23日に、戦没者を追悼し、学校などでは平和学習で沖縄戦を学びます。私の子どもの頃は、戦争体験者から話を聞くことができました。家族にも体験者がいました。しかしそれでも、遠い過去の出来事であり、その戦争の話に『私』は存在しません。私の世代でもそのように感じるのですから、今の若者が、自分に置き換えて考えることができないのは無理もない話です。

市民劇の衣裳合わせをしている時、一人の少女が絶望的な表情で鏡を見つめていました。「ダサすぎる」。この世の終わりのような表情でもんぺ姿を眺めている彼女に吹き出してしまいました。その等身大の素直な感想が、戦時中の少女たちの思いでもあるように聞こえてきました。彼女が演じたのは【女子報皇隊】。青壮年と同じような重労働を強いられた未婚の女性たちです。舞台上で彼女たちは、つらい労働に耐えながらも夢を叶えて再会することを誓い、『故郷』を歌います。幸せな未来を信じて疑わないその清い歌声は、儚くも空襲の音にかき消されてしまいました。

前年度の報告書でも書きましたが、豊かな文化資材(黄金)を持つ宮古島で、地元の方々と共に再認識し、発信したいという思いで事業名が決まりました。舞台ではその文化の一つである方言についても描かれています。戦時下、標準語の使用を強制させるため、学校で方言を話した者に罰として首から「方言札」という木札を下げさ

せました。生まれ育った島の言葉を否定され、誇りや尊厳を奪うその札の重さを、演じた方はどのように感じたのでしょうか。その当時の人々には私たちと同じように夢があり、守られるべき尊厳があり、未来があったはずで、演じた者はそれらが奪われていく心の揺れを追体験し、舞台を観た方々と共に思いを巡らせました。大袈裟かもしれませんが、どの戦争も『私』は無関係ではなく、過去の戦争や、今も起きている戦争と地続きに『私』が存在しているのではないかと考えるようになりました。

今回、宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、出演者の親御さんや地域の劇団・劇場の方々、沢山の方にご協力頂きました。沖縄には「いちやばちよーでー(一度会ったら皆兄弟)」という黄金言葉くがにことばがありますが、その言葉通り皆さん親身になって話を聞いてくださり、出会った先のお弁当屋さんや、レンタカーのスタッフさんまで、困っていることがないか声をかけてくださるのです。公演翌日、レンタカーを返しに行く時「俺たち本当幸せだなーって思ったし、翌朝釣りしながら、ここで戦争が起きたんだってふと思ったんですね。」と感想を語って下さいました。物語に自身を重ね合わせてくれていることが何よりも嬉しく、この企画に込めた思いが伝わったと感じた瞬間でした。この物語は地域の物語であり、家族の物語であり、私の物語です。そして、ご覧頂いた皆さんの物語でもあります。人はその物語に寄り添いながら、未来を築くことができるのかもしれませんが、皆さんとのご縁(黄金)を大切に、これからも『人と人』の物語を描いていきたいと、思いを新たにしています。



文化庁

Agency for Cultural Affairs
Government of Japan

文化庁委託事業
令和4年度戦略的芸術文化創造推進事業
「黄金(くがに)文化再発見」

2023年3月

発行:公益社団法人日本劇団協議会
〒160-0023
東京都新宿区西新宿6-12-30
芸能花伝舎3F

TEL:03-5909-4600

FAX:03-5909-4666

編集:喜舎場 梓